

鵠沼

久久比奴末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 9 1 号

鵠沼を語る会創立30周年記念号その1 大特集 語り継ぐ戦中戦後の記憶

私の八月十五日 鈴木三男吉 ... 1

海岸の悪童が偶然目撃した忘れられぬ三つの情景 内藤 喜嗣 ... 5

会員の語り継ぐ戦中戦後の記憶 (題名は見開きに記載)

青木 悠(17) 池田 勝彦(18) 伊藤 聖(19) 植松 民也(20)

佐藤 和子(21) 佐藤久美子(22) 佐藤 弘(23) 梶倉 健(24)

杉本 辰夫(25) 高田 清祐(26) 高塚 正子(27) 竹内 広弥(28)

竹田 祐紀(29) 中川原良子(30) 原 雅子(31) 宮澤 彰(32)

山本 高雄(33) 渡部 瞭(34) 浅沼 正城(35) 浅野 陽子(36)

穴山 雄一(37) 内田 英一(41) 有田 裕一(42) 河野 顕子(43)

岡田 哲明(44) 小林 政夫(46) 桑原 玲子(47) 永井 久子(49)

中島 明(50) 渡部かほり(51) 綿谷 克延(52) 榛葉 敏行(53)

細谷 縫子(54) 六浦美智子(55) 矢田 健爾(57)

「鵠沼を語る会」活動の記録 総 務 部 ... 59

編集後記 62

『新編相模風土記』(天保13年、1842)に、「鵠沼村久久比奴末半良」

とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠沼を語る会 発行

私の八月十五日

鈴木 三男吉（会員）

私たちにとって忘れられない、また忘れてはならない1945年8月15日、私はこの日を横浜のある警察署の留置場で迎えることになりました。のちに「横浜事件」と呼ばれ神奈川県特高の仕組んだ事件の一容疑者として、この年の4月10日に鵜沼の自宅で検挙され、それ以来拘禁されていたのです。

当日の朝、^{メンマイ}麴米のまずい朝食を終えた頃、看守の一人（巡査）が私の居る留置場の前までやってきて、「鈴木！　とうとう日本はお前たちのいう通りになるぞ！」と言って帰っていきました。この看守は、広島、長崎の原子爆弾のときも、新型爆弾を落としたことを教えてくれましたし、厳しさの中にも何か人間らしさを感じさせるものがありました。この日いよいよボツダム宣言受諾＝敗戦の発表のあることを教えに来てくれたのです。私も5月29日の横浜大空襲以来、一番の古株として雑役をやらされていたので、時には古新聞などを見る機会もあり、敗戦へと急傾斜しつつあることは判っていましたが、こんなに早く終末が来るとは夢にも思いませんでした。こみ上げてくる喜びをじっと抑えながら、この看守に有り難うを心の中で繰り返していました。

そして翌日の8月16日、早くも釈放となりその日鵜沼の自宅に帰り着いた次第です。

ところで「横浜事件」とは一体どういう事件だったのでしょうか？　小百科辞典といわれている『広辞苑』（岩波書店）では一つの項目として取り上げ、次のように説明しています。

太平洋戦争下の言論弾圧事件。1942年神奈川県特高がでっちあげによる共産党再建謀議の容疑で雑誌編集者ら数十人を検挙した。過酷な取り調べにより獄死者四人を出し、「中央公論」「改造」が廃刊させられた。（『広辞苑』第5版）

1942年9月11日の川田寿（世界経済調査会）夫妻にはじまる神奈川県特高の検挙は、この事件の最後となった1945年5月9日の小林勇（岩波書店）検挙に至るまで、少数のグループ別に十数回にわたって行われ、総数は63名に達し、4名の獄死者を出しました。事件の事実を要約すれば上の『広辞苑』の説明通りですが、私がどうしても納得できないのは、言論を弾圧するためになぜ「共産党再建謀議の捏造」が必要であったか、ということです。しかもこの謀議を捏造するため、神奈川県特高の名を馳せた暴虐極まる拷問が虚偽の事実を自白するまで続けられたのであります。

言論の弾圧はこの横浜事件とは関係なく、すでに堂々と行われていました。評論家細川嘉六の「世界史の動向と日本」という論文を1942（昭和17）年8月・9月号の二回にわけて掲載した総合雑誌『改造』は、情報局の検閲をすませたにもかかわらず、「日本読書新聞」の9月14日号に掲載された陸軍報道部長谷萩大佐の一言によって発売禁止となり、執筆者細川氏もまた警視庁に逮捕されました。この背後には報道部の顧問的役割をしていた右翼団体の示唆のあったことはもちろんであります。

一方神奈川県特高は、このこととは関係なく川田寿氏関係者の家宅捜査を行っているさい、ある容疑者のアルバムから一枚の記念写真を発見したのです。そしてその写真の後列中央に立っているのが、軍部によって共産主義者であるとレッテルを貼られ、すでに逮捕されていた細川嘉六であることが判ったときの神奈川県特高の喜びは、想像にあまるものがあります。「共産党再建謀議」はこの写真から神奈川県特高の頭の中に描かれ始めたのです。

この写真は、細川氏が東洋経済新報社の出版企画「日本文明史」の中の一冊『植民史』を担当したさい、その完成記念に、編集担当の加藤政治氏をはじめとし改造社、中央公論社、満鉄調査部の友人たちを、自分の郷里富山県泊町の旅館「紋左」に招待して一夜を過ごしたときのもので、写したのは出席者の一人西尾忠四郎氏です（したがって西尾氏はこの写真には写っていません）。楽しい一夜の歓談が、多くの犠牲者を出した横浜事件に化したのは、こういう次第です。

細川嘉六氏は、「再建謀議」が特高の頭のなかで構築されていくとともに、東京の拘置所から横浜の拘置所へ身柄を移され、終戦時にはこの写真のなかにいる人々と房を共にしていました。そして8月15日の朝、その中の一人木村氏に次のようなレボを伝えたそうです。



「横浜事件」フレームアップのきっかけとなった写真。この一葉の写真をもって、特高は「共産党再建の会議」ときめつけた。前列左より、平館利雄（満鉄調査部）、木村亨（中央公論社）、加藤政治（東洋経済新報社）、相川博（元改造社）、後列左より、小野康人（改造社）、細川嘉六、西沢富夫（満鉄調査部）

「木村君！当局のわれわれに対する拘禁は全くの不法拘禁で許せない。総理大臣か司法大臣がこの刑務所へやってきて、われわれの前に両手をついて『悪うございました』と謝らない限り、断じてここは出てやらぬ腹を決めたまえ。」

いま考えてみれば確かに細川氏のいわれるとおりですが、一日も早く疥癬の攻撃からも逃れたいと思っていた私たちには、この決心はつきませんでした。この疥癬も非常に手強い敵で、戦後の活躍を期待されていた哲学者三木清が、惜しくも獄中で病死したのも、この疥癬が原因といわれています。

もしこのレボを実行していたらどうなっていたでしょうか？ それを思うと残念でなりませんが、私たちは敗戦後直ちに^{ささげ}笹下会という被害者の会をつくり、一つの集団として拷問をくわえた神奈川県特高たちを告訴することにしました。

結局この告訴は「特別公務員暴行傷害事件」として被告28名原告33名の大きな訴訟となり、原告の33名はそれぞれ自分の受けた拷問の状況を供述書として書いて提出しました。これらの供述書は「弁護士海野普吉」刊行会によって一本に纏められ現在も貴重な資料として残されています。

しかしこの結果は、33名のうちただ一人（益田直彦氏）の傷跡が証拠として認められただけで、拷問を加えた3人の特高にそれぞれ懲役1年半、1年、1年の実刑判決が下されました。告訴したのが昭和22年4月25日、最初の判決が下されたのが、昭和26年3月28日です。被告側は直ちに控訴しましたが却下、更に上告しましたが、それが最高裁により棄却となり、最初の実刑判決が最終決定されたのが昭和27年の4月24日でした。私たちはこれによってひとまず安堵の胸をなでおろしましたが、後で聞いた話では、本人たちは刑務所に入っていないということです。最終的に刑が確定した昭和27年4月24日の4日後の4月28日に講和条約が発効して「特赦」になったからです。私はこれを知り、「横浜事件」とは最後まで謀られた事件であったことをしみじみと感じた次第です。

これで終わるならば、横浜事件の末席に列った被害者の一人が鵜沼に住んでいたということに過ぎませんが、鵜沼は赤い糸ならぬ黒い糸で当初から横浜事件と結ばれていたようです。拷問実行の中心的な存在でその責任を問われるべき特高の住居が、当時からこの鵜沼に在ったのです。そこに住み、横浜へ通勤していたかどうかは別にして、私たちが特高を告訴したときの告訴状にはその住所が明記されており、後日鵜沼地区の住居明細地図ができたときにも、その姓名が明確に示されていました。しかも私の家とそれほど遠くないところです。これもまた不思議な因縁です。

この特高は戦後東京で食べもの屋をしていましたので、笹下会の人びとが真相の一部でも聞けるかも知れないと訪れましたが、詫びる言葉もなく、公務員は退職後も秘密を守る義務があるといって、事件には一切触れなかったそうです。

結局真相は判らないまま現在に至っていますが、60年以上も経た今日、私たちは「こんな国に誰がした」よりも「こんな国に二度としない」ほうが大切だと考えています。

検挙された主な言論関係の人々

- 〈世界経済調査会〉川田 寿、高橋善雄、諸井忠一、益田直彦
- 〈満鉄調査部〉 青木了一、平館利雄、西沢富夫、西尾忠四郎、内田丈夫、手島正毅
- 〈改造社〉 相川 博、小野康人、水島治男、青山鉦治、小林英三郎、若槻 繁、大森直道
- 〈中央公論社〉 小森田一記、畑中繁雄、藤田親昌、青木 繁（青地 晨）、沢 赴、木村 亨、浅石晴世、和田喜太郎
- 〈日本評論社〉 美作太郎、彦坂竹男、松本正雄、鈴木三男吉、渡辺 潔
- 〈岩波書店〉 藤川 覚、小林 勇
- 〈朝日新聞社〉 酒井寅吉
- 〈その他〉 加藤政治、那珂孝平

主要な文献

- ・畑中繁雄『党書昭和出版弾圧小史』（図書新聞社、1965年）
- ・青山憲三『横浜事件―「改造」編集者の手記』（弘文堂、1966年）
- ・美作太郎・藤田親昌・渡辺潔『横浜事件』（日本エディタースクール出版部、1977年）
- ・中村智子『横浜事件の人びと』（田畑書店、1979年）
- ・木村 亨『横浜事件の真相―つくられた「泊会議」―』（筑摩書房、1985年）
- ・黒田秀俊『横浜事件』（学芸社、1975年）
- ・笹下同志会編『横浜事件資料集』（東京ルリユール、1986年）

★この小文を書くにあたり、改めて上記の資料を読ませていただき、著作権を持つ方々のお許しを得ず、直接・間接に引用しましたことをお詫びすると共に厚く御礼申し上げます。
(すずき みおきち)

海岸の悪童が偶然目撃した 忘れられぬ三つの情景

内 藤 喜 嗣(会員)

その1 日本本土初空襲

1941(昭和16)年12月8日、ハワイ真珠湾攻撃から太平洋戦争が始まって4か月後の昭和17年4月18日に、アメリカは意表を突いて報復の日本本土への初空襲を行いました。この空襲は16機の中型の爆撃機を使い、東京をはじめ、川崎、横浜、名古屋、四日市、神戸を襲撃し、中国浙江省の奥地の飛行場に逃避したものでした。

私は64年前の当日、ほんの2、3分この爆撃に向かう、飛行機(敵機)1機が江の島の西浦を掠めるように飛び去るのを目撃したのです。

目撃当日の朝からの状況を振り返って見ますと、当時小学校1年生でしたが、1学期が始まり、朝礼での体操の締めくくりは新しく取り入れられた全員でワッショと掛け声を掛けながらの「天突き体操」10回と、約5分間、上半身はだかの体を乾布摩擦で鍛えた後、駆け足足踏みに移り上級生から順に、一列で走って足洗い場(1坪ほどの長方形で約10cm水がはってある)に行き、水を蹴立て通り抜け、各教室に入り、自分の席に着席しました。

横道に逸れますが、これは湘南学園のことで、前年の4月に着任した、八木園長と松田教頭は、満鉄の青年学校から来られた厳格な先生であったので、別荘族のおぼっちゃん、お嬢ちゃんのひ弱さに呆れ、年が明けると保護者を集め「新学期からは体をビシビシ鍛える」ことを告げ、「休ませないように」といい渡していました。

普通は一時して先生が来て、修身の授業から始まるのですが、突然サイレンが鳴り出しました。以前演習では聞いていましたが、音の切れ方から判断すると警戒警報で、初めてのことでした。しばらくして先生と6年生の週番がやって来ました。そしていつも弁当の時に貰う「肝油のゼリー」が配られました。そして帰り支度をして、校庭に集合するようにいわれ、校庭に全校生徒が集まると、帰宅方面毎に分けられ班が創られました。この班は終戦まで組まれていました。

そんなこんなで、11時近くになって、その日は班毎に6年生が引率して帰宅することになり、てっきり演習だと思っていました。

家に着いてしばらくすると、片瀬海岸の班を引率していた、兄の友人の富田さんが腹が痛い、駆け込んで来ました、母は仕方がないと片瀬の班はしばらくわが家で休んでから帰ることにしました。庭の芝生の築山で車座になったり、寝転んだりしていました。富田さんはその日の週番の役得で、肝油のゼリー(今のグミのような口当たりで、砂糖が塗^{まぶ}してあって美味かった)のつまみ食いのし過ぎが祟ったようでした。

突然静かな庭に、グアーンと押さえ付けるような今まで聞いたことのない爆音が響いて来ました、みんな驚いて海の方角を見ると大きな飛行機(当時では)が江の島すれすれに飛んでおり、高度を上げるための音でした。そして誰かが「あれは星のマークだ、敵機だ」といったので皆朝のサイレンを思い出しばっかりしましたが、飛行機は何事もなく高度を上げながら飛び去って行きました。そして、この湘南地区には空襲警報のサイレンは鳴らなかったと思います。



その日の新聞の夕刊から報道がなされましたが、今読み返して見ると、開戦来破竹の進撃中の日本軍の戦果に沸く日本本土への敵機の襲来に動転した軍司令部はデタラメを発表、報道させたものだと思います。

※ 当日の朝日新聞の夕刊(昭和17年4月18日付)

けふ帝都に敵機襲来

九機を撃墜、わが損害軽微

東部軍司令部発表(十八日午後二時)一、午後零時三十分ごろ敵機數方向より京濱地方に來襲せるも、我が空地兩航空部隊の反撃を受け、逐次退散中なり、現在までに判明せる敵機撃墜數は九機にして我が方の損害輕微なる模様、皇室は御安泰に互らせらる

沈着な隣組の大活躍

當局幕僚談

十八日午後爆彈落下現場を視察した當局幕僚談

焼夷彈が落下した現場では隣組防火班は平素の訓練通り沈着に消火に任じてゐた、焼夷彈の威力は大したものではなかつた

※ 翌日の朝日新聞の朝刊(昭和17年4月19日付) 一面

我が猛撃に敵機逃亡

軍防空部隊の士氣旺盛

東部軍司令部発表(十八日午後四時半)

- 一、皇室は御安泰に互らせられる事は我々の等しく慶祝に堪へざるところなり
- 二、防空監視隊の敵機發見およびその報告極めて迅速にして適時空襲警報を發令し得たり
- 三、敵の空襲は空地防空部隊の奮闘と國民の沈着機敏なる行動とにより被害を最小限に止め得たり、國民各位は更に防火消火の準備を促進せられたし
- 四、敵は若干の爆彈のほかは焼夷彈を主として使用せり、焼夷彈は二キロのものなるが如くその威力は何ら恐るゝに足らざるも、屋根を貫きたる後、天井裏にとどまるものあり特に注意せられたし
- 五、軍防空部隊も初めて災敵に會し士氣極めて旺盛、更に來るべき敵に對し益々戦備を密にしあり
- 六、敵の爆撃により死傷せられたる軍官民各位に對し深甚なる哀悼の意を表す

各地區の警報を解除

名古屋、神戸の被害も輕微

中部軍司令部發表 十八日午後愛知地區に空襲警報發令せり、引續き東海地區、京近畿地區、北近畿地區に空襲警報發令せり

中部軍司令部發表 (午後三時)(一)本日午後一時三十分頃 敵機二機名古屋を空襲し爆撃せるも被害輕微なり (二)また同二時三十分敵機一機神戸を空襲し焼夷彈を投下せるも大なる被害なし (三)國民諸君は今こそ勇戰奮闘して防空必勝を期すべし

中部軍司令部發表 (午後四時)(一)名古屋付近には六箇所焼夷彈を投下せるも目下ほとんど鎮火せり(二)神戸には三箇所に焼夷彈を一箇づつ投下せるも目下鎮火せり(三)三重縣四日市および和歌山縣下も地方農村に機關銃射撃を加へたるも我が損傷なし

中部軍司令部發表 (午後六時五十分)東海、南近畿、四國東、東中國各地區の空襲警報を解除せり

西部軍司令部發表 (十八日午後六時三十分)(一)帝國國土東部中部地方に對して敵機若干は初めて空襲したるも損害僅少なり(二)その一機は午後四國室戸岬南方海上に現出せるをもつて、軍は直ちに空襲警報を發令せるも敵機は軍管下防衛の適切なる手段により遂に管内に侵入する能はず(三)軍管内國民は一層警戒を密にし 特に防衛態勢の確立を促進すると共にいよいよ訓練を徹底ならしめ以て敵の再來に萬全を期さんことを望む

沈 着 冷 靜 機 敏 な 處 理

十八日の敵機空襲はわが軍防空の奮闘と、全國民の沈着機敏なる動作によって被害は最小限度に止められ、敵國に企圖達成の餘地を與へなかつた。しかして今回の敵空襲の企圖を省察するに敵國は大東亞戰爭勃發以來四箇月餘南方戰場の至るところに、皇軍勇士のため連戰連敗を喫し大東亞共榮圈全體にわたる攻略、既定作戰において、殆ど問題にならぬ一方的な我が勝利に歸した確たる事實の前に焦燥の念拭ひがたきものあり、この決定的頽勢を一舉にして挽回する企圖の下にここにわが本土空襲を企圖するに至つたものであらう、しかるにこの敵の企圖もわが國土に損害らしき損害を與へ得ずして撃退せしめられるに至つた。この日の防空に示されたわが國民の沈着にして冷靜機敏、そして活躍を語る美談の数々は、よくわが國民の精神力と訓練、大國民としての信念を遺憾なく吐露したものであつた。敵はさらに今回のやうな神經戰的な我が本土空襲を企圖し來るものと當然

覚悟しなければならぬ、國民は今後もますます國土防衛の完遂強化につとめ祖國の土を舉國一致して挺身防衛しなければならぬ。

(以下略、三面記事等関連資料は、鶴沼郷土資料展示室に「報復の日本本土初空襲資料」として所蔵されている。閲覧可能)

この空襲で全く報道されなかったのは、軍需工場での被害でした。空襲に参加した敵機は空母が日本軍の管制に掛かったことから緊急発進により編隊が組めず、誘導に支障があったようでしたが、京浜地区に來襲した米軍機の過半数は確実に京浜工業地帯、横須賀海軍工廠、名古屋、四日市等で空襲の戦果を上げていたことが、後日の調査で判明しています。

当時の日本政府、軍部は相当強い報道管制を布いたようで、多くの事実が隠された他、4月20日に今後の空襲の可能性と國民の覚悟の喚起のため、本土空襲を狙う米国の十機種の新鋭爆撃機を写真付きで報道した以降は、この空襲に関する報道はなされませんでした。

この空爆を米国の側から見た視点

昭和16(1941)年12月8日早朝の真珠湾攻撃、東南アジアへの進攻で始まった太平洋戦争は、緒戦における日本軍の予想外の破竹の進撃に連合軍は応急対策に追われ、何とか真珠湾の報復として一矢を報い、戦意高揚を図りたいが日本本土は島国でありヨーロッパで活躍中のB-17長距離爆撃機をしても爆撃後の退避航続に問題がありました、超空の要塞と云われた超長距離爆撃機B-29の開発を指揮し、先付けオーダーまでしていた陸軍航空隊総司令官ヘンリー・H・アーノルド大将(後元帥)は実戦配備まで1年余を要するB-29以外の奇策を練らざるを得ませんでした。そこで米国艦隊司令長官兼海軍作戦部長のキング提督と日本本土空爆の計画が練られ、東京爆撃を要望していたルーズベルト大統領の了承を得、実施することになりました。

この日本本土空爆計画は、航続距離の長い陸軍の中型爆撃機を空母に積み込み日本近海から発進させ、日本本土を爆撃したのち中国の非占領地域にある飛行場に着陸させるというものになりました。爆弾を積んで滑走距離の短い空母の甲板から発進し洋上遠く爆撃を行い、さらに中国の飛行場にまで飛ぶためには乗員の高い技量が求められました。そこで白羽の矢が立ったのは、様々な飛行記録を持つ著名な飛行家ジェームス・H・ドゥリットル中佐で、この困難な計画の実施の

大特集 語り継ぐ戦中戦後の記憶

私の八月十五日	鈴木 三男吉	1
海岸の悪童が偶然目撃した、忘れられぬ三つの情景 ...	内 藤 喜 嗣	5
思い出したくない戦中時代	青 木 悠	17
私の戦中・戦後	池 田 勝 彦	18
昭和21年6月-23年12月の金銭出納簿	伊 藤 聖	19
日本はこれでいいのか? -私の戦中戦後史から- ...	植 松 民 也	20
風化することない戦争中の日々	佐 藤 和 子	21
戦中・戦後を垣間見て	佐藤 久美子	22
生まれて最初の記憶=染みついたもったいない精神= ...	佐 藤 弘	23
高瀬の池の思い出	梶 倉 健	24
戦中・戦後の学生生活	杉 本 辰 夫	25
子 供 の こ ろ	高 田 清 祐	26
思い出すままに	高 塚 正 子	27
自分の戦後はいつ終わったのか	竹 内 広 弥	28
私 の 終 戦	竹 田 祐 紀	29
戦争の悲惨さを次世代へ伝えることを忘れまい	中川原 良子	30
叔 父 の 戦 死	原 雅 子	31
戦中の思い出	宮 澤 彰	32
私の昭和二十年	山 本 高 雄	33
物 心 と 戦 争	渡 部 瞭	34
学徒動員回顧	浅 沼 正 城	35
戦 災 の 記 憶	浅 野 陽 子	36
第二次大戦敗戦前後の我が家	穴 山 雄 一	37
海の家でダンスパーティー	内 田 英 一	41
私の戦中・戦後 ~思い出すままに~	有 田 裕 一	42
私の八月十五日	河 野 颯 子	43
或る没落した家の話	岡 田 哲 明	44
東京最後の空襲の日の体験	小 林 政 夫	46
戦争に重なる顔	桑 原 玲 子	47
私の戦中戦後史 軍国の乙女物語り	永 井 久 子	49
落 書 き	中 島 明	50
青い空と真っ赤な翼	渡部 かほり	51
銀シャリへの夢	綿 谷 克 延	52
特 攻 隊	榛 葉 敏 行	53
鵠沼から高松へ	細 谷 縫 子	54
焼夷弾の雨の下で -横浜大空襲体験記-	六 浦 美 智 子	55
戦争の思い出	矢 田 健 爾	57

指揮官に任命されました。

彼はこの計画にノース・アメリカンB-25双発中型爆撃機を使用することを決め、部隊を編制しました。この部隊は短距離発進、超低空飛行の猛訓練を受けたのち、最新の高性能の爆撃照準器等の装備が日本軍の手に渡らぬように、旧式の装備に積み替えられたB-25 16機が積み込まれたハルゼイ中将の率いる第16機動部隊が空母ホーネットで4月2日にサンフランシスコ・アラメダ基地を出陣しました。

ドゥリットル隊の初期の作戦計画は、4月19日の日曜日の夕刻に東京の東方500マイル(805キロ)の地点で発進し、東京、横浜、名古屋、大阪、神戸を爆撃した後、中国浙江(チョーチャン)省の奥地にある麗水などの飛行場に着陸するというものでした。ところが、予定より1日半早い18日の早朝、この機動部隊は東京の東方約700マイル(1120キロ)の地点で日本の哨戒艇第二十三日東丸に発見されてしまいました。(第二十三日東丸は打電後間もなく米軍に撃沈されました)ハルゼイ中将は位置を知られたとして、予定を変えてB-25全機のただちの発進を決断しました。

ドゥリットル隊は予定をはるかに超えた長距離を飛行することになり、編隊を組むための燃料の消費も惜しんで、隊長機を先頭に一列になって飛行し、各機ごとに目標を爆撃して脱出することになりました。

空爆の実況

緊急発進したB-25は隊長機を先頭に一列に海面すれすれの超低空で西進し、日本本土に接近、18日正午頃、水戸付近の沖で各機目標に向け変針、逐次、日本本土上空に侵入しました。

関東地区に侵入したB-25は13機で600メートル内外の低空で1機ずつ12時15分頃から荒川区尾久や淀橋区(現新宿区)早稲田鶴巻町付近に來襲し、爆弾や焼夷弾を投下、機銃掃射も行いました。帝都では空襲警報が発令されたのは12時25分で敵機が來襲してからでした。横浜は午後1時前後だったようでした。

東部軍司令部は第二十三日東丸からの打電で米機動部隊の接近を知ると、ただちに警戒警報を発令しました。しかし艦載機の航続距離からみて、機動部隊は日本本土への接近を続けて翌19日早朝に本土空襲を行うだろうと想定して対策を立てました。空母が航続距離の長い陸軍機を乗せてこようとは、日本軍の常識では思いも及びませんでした。また、米軍機が超低空で接近したうえ、遅ればせながら防空監視哨が敵機発見の報告を東部軍司令部に送ったにもかかわらず、当初の

判断を変えず、空襲警報を出さずに情報の審査に取り掛かったため、敵機は易々と襲来し、日本軍の迎撃は遅れ、低空飛行の敵機には高射砲の炸裂高度が合わず、防空飛行隊もこれを追尾出来ず、無傷で脱出を許しました。

しかし米軍側にも厳しい試練がありました。日本海に脱出した米軍機は一機は故障のため最短距離にあるウラジオストックに飛びソ連官憲に押収抑留されました。

外の15機は中国まで飛んだものの到着が夜であり、日時の変更の連絡が機密上で不備があり、不時着、着水、墜落等無事な着陸はなされませんでした。そのうえ2機は日本軍の占領域に不時着し乗員8名は捕虜となり、見せしめとして10月に3名が処刑されました。

その2 B-29爆撃機の墜落

飛来した数え切れないほどのB-29爆撃機のうちの1機が江の島の南西沖に墜落しました。

1945(昭和20)年4月15日の夜遅く、警戒警報のサイレンが鳴り、ラジオの東部軍管区情報の敵機襲来の警報の終わらぬうちに、轟音が響いてきました。早速照射された赤山の探照灯に照らされたB-29は東京大空襲の時と同じく低空で、西から東へ京浜地域に向かういつものコースをつぎからつぎと、時たま作裂する高射砲におかまいなく飛んで行きました。

しばらくして灯火管制でいつも真つ暗な東の空が薄赤くなったほど、またしても京浜地域が爆撃を受けました。

一時後、異様な金切音の爆音が響いて来ました。急いで庭先の砂山に出て、音のする方角を見上げると、北の空から真つ赤な火の玉がやってきました。早速点灯された探照灯に照らし出されたのは、被弾したB-29で、わが家の上を通過して江の島の稚児の淵の南西沖に墜落して爆発しました。辺りの海面は火の海となりましたが、しばらくして、また暗闇に戻りました。

後日、「赤山の高射砲の止めの一発が命中した」と言う流言がありましたが、真偽の程は定かではありません。

少し経って藤沢警備隊の山下曹長以下の5、6人の分隊が駆けつけて来ました。「伊勢山の監視所から見ていたら、鵠沼海岸に墜落した様に見えたので、参りました、異常有りませんか？」と母に告げていた。父は当夜、当直将校として監視



所に詰めていたので、隊員の計らいで心配して寄られたようでした。隊員は安堵して、海岸の巡視に出て行きました。

翌朝、日の明けるのを待って、海岸に行きましたが、海は静かで、黄色いスポンジの破片が岸に寄せられていただけでした。(近代郷土史研究家の文に、「尾部を空につきだし数日浮いていた…」とあるのは間違い)。午後になってから、いろいろの漂流物が打ち上げられはじめました。中でも悪童連の人気は、擦ると甘たるい好いニオイがした防弾ガラスの破片でした。

登校途中、木下邸の脇門を潜った所に、3センチ程の太さの葉莢の付いた機銃弾が連なって落ちていました。当時の悪童連の戦利品(コレクション)の目玉は不発の機銃弾だったので、目を丸くして喜んだものの、あまりの大きさと量に、恐れをなして1発づつを木の根元に隠して、植木屋のお婆に、「鉄砲弾が落ちてるよ」と告げ、学校に急ぎました。以後の処理は不明ですが、戦利品は帰りにそれぞれ自宅に持ち帰って隠しました。(後日、学校で不発弾の爆発事故があり、戦利品は引地川に捨てられました。)

学校から帰ると、当直明けの父が家におり、B-29は伊勢山の真上を通過して南に飛んで行ったこと、夜半にパラシュートで脱出した若いアメリカ兵が監視所に連れて来られて、取り調べをして、憲兵隊に引き渡した事など前夜の出来事の話をしてくれました。兵士は19歳で最後尾の銃座の砲術手で一番初めに脱出したこと、通常、被弾しても帰還コースの九十九里浜に脱出をするが、損傷がひどく相模湾に引き返したこと、相模湾にも救助のための潜水艦が待機していることを

話したといひます。彼は大変薄着だったので、寒くないか？と労り、捕虜の国際法上の扱いについて伝え、そして憲兵隊に引き渡したといひていました。

この墜落B-29から都合4名の搭乗員がパラシュートで降下しましたが、2番目に本鵠沼に降下した兵士は、会誌「鵠沼」85号に長谷川襄二氏が寄稿しているように(月日は間違い)、相当の深手を負っており、後日の調べでは、憲兵隊で死亡しています。その他は海岸を歩いていたとか、藤沢駅南口、若尾山で捕まったとか諸説ありましたが、いずれにしても藤沢駅から目隠しをされ、憲兵隊に国鉄で連れていかれました。

終戦後、横浜のニューグランドホテルのGHQからのこの件に付いての出頭を求められた父が出向くと、当時の扱いに謝辞があり、曾て父のニューヨーク滞在時の話題から高官との縁の糸が深まり、親交に繋がりました。

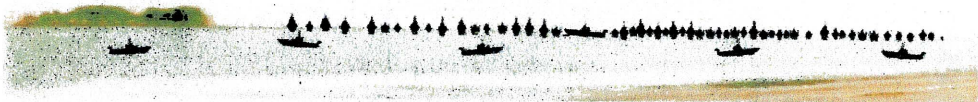
このB-29墜落については、渡部会員が日米のHPを検索、別紙克明なデータを提供頂きました。→16頁

その3 連合艦隊の日本進駐

1945(昭和20)年8月27日の早朝、異様な轟音に目を覚まし、海岸に出て見ますと、昨日までの台風一過の相模湾に驚嘆する光景を目にしました。

1945(昭和20)年8月27日～8月29日 連合軍は日本本土進駐のため艦船を相模湾に集結させた。

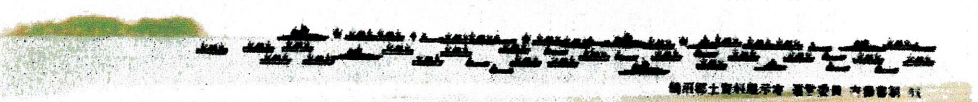
- ① 台風一過の8月27日早朝5時頃、異様な轟音に海岸に出て見ると相模湾5艘程が海岸近くを高速で走り回っていた。そして水平線には砲身を上げた軍艦がこちらを向いてぎっしり並んでいた。



- ② 正午過ぎになると、江之島の麓から大小の砲艦艇が、砲身をこちらに向けて東から西に連続しだした。まさに艦砲射撃が行われるのかと恐怖を覚えた。



- ③ 正午頃には、ニミッツ提督の持たぬ威光か？ 輸送船に乗り込んでいた第4海兵連隊戦闘団と、第6海兵師団の将兵に富士山日本を見せるためか、輸送船を次々と海岸近くに回航させていた。夜は投光機でのやり取りの調子が、あちらこちらで見られた。28日午前まで停泊していた。



相模湾土佐資料館 運営委員 大橋孝 氏

水平線一杯に隙間なく軍艦がこちらに砲身に向けて並んでいました。そして、手前では5艘程のフリゲート艦(掃海艇)が走り回っていました。沖縄がアメリカに取られ、次は相模湾への上陸と聞かされていたので、8月15日天皇陛下の敗戦の玉音放送を聞いてはいましたが、それでもアメリカ兵が攻めて来るのではと恐ろしくなりました。

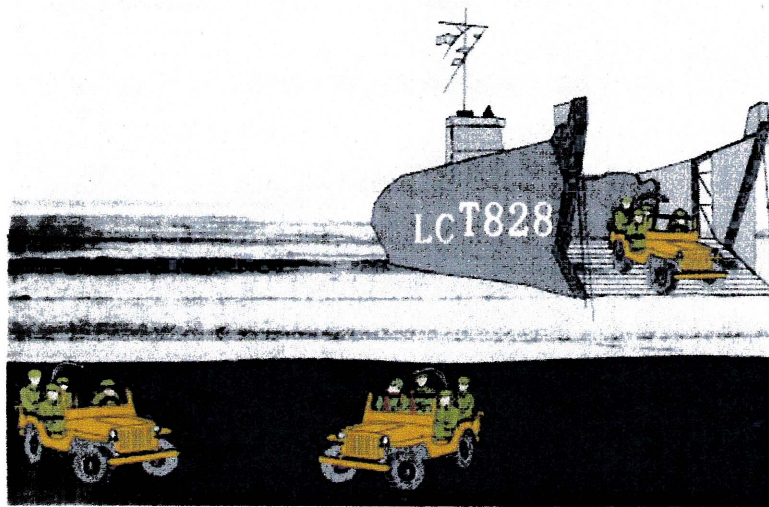
午後になって、江の島の蔭から大砲をこちらに向け、た軍艦が次々と現れ、観艦式のように東から西に巡航した後、沖を目指しました。その後に多数の輸送船が来て、停泊しました。夕方になると沢山の小型のランチや上陸用舟艇がその間を行き来するのが見られ、日が暮れると、灯火は消していましたが、黒い船影の間で信号灯の瞬きがあちらこちらでホタルのように光りました。



提供：藤沢市生涯学習課博物館準備担当

翌朝、夜が明けるのを待ち兼ねて海に行きました。相変わらず海は船で埋まっていました。もう何人かの人が海岸にいました。そして流れ着いた物を拾っていました。缶詰、飲料ビン、蠟で覆われた四角い箱(兵隊の携帯戦場食)等が故意に流したのか？打ち上げられていました。その中で特異だったのは、消火器のような頑丈な造りの真っ黒な小型のボンベでした。側面に白字でan insect spray DDTと書いてあったのですが、英語が解らず、爆弾ではないかと誰も手を付けませんでした。そこへ、家で調べて来た方が戻り、拾い始めたので争って拾いました。その方の話で殺虫剤のスプレーと解りました。扱いが解らずスプレーが止められずボンベに指が凍りつき、凍傷になった人もいました。

この日はどこからか大勢の人が見物に押しかけました。双眼鏡で眺めると向こうからも、大勢の水兵や兵隊がこちらを眺めていました。



夕刻一艘のLCT(=LST、戦車揚陸艦)が現スケートパーク前の海岸に接岸し、艦の前が開き、ジープ(この言葉も後になって知った)がキャブレターと排気管の二本のエントツを立て、けたたましい爆音を立てながら4台走り出て来ました。ジープには4人づつ兵隊が銃を持って乗っていました。しばらく辺りの波打ち際を走り回ってから、何事もなく引き揚げました。

また、この日は暗い茶褐色の小型の連絡機が何回か海岸に着陸しました。人のいない所にフアーと着陸して、人が近付くとフアーと簡単に飛び立ちました。

翌29日は朝から船が動きだし夕刻には半分程の艦船はいなくなりました。

新聞では、台風のため占領軍の日本本土進駐日程はすべて2日遅れとなって、28日、第一陣として米第11空挺師団の先遣隊150人が、C.T. テンチ大佐の指揮のもと輸送機C-46、45機で厚木飛行場に到着、外国軍隊による占領が始まりました。

8月30日、連合国主力部隊の進駐が開始され、総司令官ダグラス・マッカーサー元帥も自ら第8軍第11空挺師団兵士4000人を率いて午後2時過ぎ厚木に到着、司令部幕僚ら一部兵力と共に横浜の税関本部内(AFPAC)とホテル・ニューグランド(SCAP)に急設されたGHQに到着しました。同時に9時30分横須賀から海兵隊(マリン)の将兵が上陸を開始、進駐がはじまり、31日以降、米第8軍の主力部隊が横浜港・千葉県館山港から上陸し各地に進駐しました。

藤沢は藤沢航空隊の跡に、第11空挺師団の隊が、茅ヶ崎は南湖の海軍病院跡に第一騎兵師団の戦車隊が進駐しました。

以上の目撃した情景には、私が学校に行っていた時間は抜けています。

(ないとう よしつぐ)

1945年4月16日、江の島沖に墜落したB-29から脱出した乗組員について

Mission 68 として4月15-16日の夜間川崎を空襲した194機のB-29のうち、12機を失った。うち、江の島沖に墜落したB-29の機体番号は#42-94034である

42-94034 29th BG, MACR 14271, Watson crew 12 MIA

Crashed off the Coast of Enoshima Island, Fujisawa City, Kanagawa Prefecture. 8 KIA, 4 POW: 1 died from his wounds at Tokyo Kempei Tai Headquarters, 3 were burnt to death in the Tokyo Military Prison fire on 25 May 1945

* MACR 14271 = Missing Air Crew Reports 記載ナンバー 14271

* MIA = missing in action 戦闘での行方不明兵士

* KIA = killed in action 戦死した

* POW = Prisoners of War 戦争捕虜

当該機の乗組員は12名であった。うち、8名は戦死した。残り4名はパラシュートで脱出し、藤沢市内に降下して拘束された。そのうち1名は東京の憲兵隊本部内で怪我のため死亡した。残り3名は東京の陸軍刑務所に収監されたが、5月25日の第二次東京大空襲で焼死した。

東京陸軍刑務所に収監された乗組員は、次の3名である。

氏名	階級	認識番号	拘束日時	拘束場所
MANNING, Clifford	少尉	0-2060552	1945/4/16	神奈川県藤沢市
McNIVEN, Donald W	軍曹	31453508	1945/4/16	神奈川県藤沢市
SCHUBERT, Donald L.	軍曹	11138661	1945/4/16	神奈川県藤沢市

(前略) 本土決戦準備に忙殺されていた東部軍管区司令部では、空襲による被害も加わり、搭乗員の拘束場所を確保できず、搭乗員を渋谷区宇田川町の東京陸軍刑務所に収容することとした。搭乗員たちは、第四号監(木造瓦葺、監房17室)に収容、約2坪の一監房あたり4人が詰め込まれていた。

1945年5月25日22時38分から26日01時13分にかけて462機のB-29が東京地区最後となる大規模攻撃を行い、渋谷区を主として、赤坂区、牛込区、中野区等で死者3,596名、重軽傷17,899名、全焼165,103戸、罹災者620,125名の被害を生じた。陸軍刑務所も全体に焼夷弾が落下、第四号監は解放命令が最後となったため、多くの搭乗員たちは鍵のかけられたままの監房で焼死した。

調査：渡部 瞭(会員)

思い出したくない戦中時代

青木 悠 (会員)

私が鵠沼に定住したのは昭和14年7月小学校6年生からである。それ以前にも昭和8年から9年にかけて現在の家の隣に住んでいたことがあった。もともと鵠沼は母方の祖父木下米三郎が鵠沼の開発にかかわったなじみの地でもある。

藤沢の小学校に江ノ電で通学していた。学校帰りに道草仲間と鵠沼駅の前の電気屋に寄ってラジオについて教えてもらったり、冬は柳小路で途中下車し、線路脇の凍った田圃でスケートをしたことが思い出される。朝の通学路は藤沢駅から銀座通りを途中で右折し直進すると学校だが、一つ手前の横丁を入ると遊郭があり、その中をわざわざ通るおませな者もいた。藤沢の銀座通りは道幅が今の半分位で、建物こそ変わったが今と同じような街並みであった。中学2年の時、太平洋戦争が始まり、戦勝気分酔っていた頃、父が日英外交官交換船で南アフリカから帰国し、海外の事情を密かに聞き勝算のないことを知ったが、軍国主義教育で育てられた私にはそれでも戦う気持ちに満ち溢れていた。やがて戦局は逆転し、学徒動員で学校を離れ工場で軍需品の生産の日々となった。

当時のことは今でも思い出したくもない灰色の青春であった。

昭和20年8月15日、その日は焼け付くような快晴。正午に次の動員先の静岡で戦争終結の放送を聞いた。その夜の明々と灯した電灯が眩しかったことが今でも瞼に焼き付いている。動員が解かれ直ちに帰鵠。数日後海へ行ったら相模湾一帯にアメリカの艦船で埋め尽くされていた。一言もなかった。

食糧難で、庭の松の木を切り芋や麦、南瓜を作り、ヤギを飼い、その乳で栄養を補った。母は自分の着物を持って遠く山北や秦野まで買出しに出かけ、私たちの空腹を補ってくれた。

サイパン、沖縄、広島、長崎…多くの同胞の犠牲のおかげで、60年間平和な日々を送れることを心より感謝している。

(あおき ゆう)

私の戦中・戦後

池田 勝彦（会員）

ハワイ真珠湾を空襲し米国と戦争状態に突入したのは、私が藤沢国民学校1年生の時だった。その年の4月1日から小学校は国民学校と改称、宮城遙拝や軍事教練が課され、音階もドレミファからハニホヘトイロハに。日米開戦後は新聞・ラジオの天気予報・気象通報も中止された。

昭和17年4月、米軍機が東京・横浜を初空襲。米・味噌・醤油は切符配給制に、衣料は点数切符制に、生活必需物資はそれぞれ統制され、因みに米は大人が1日2合3勺、衣料点数は1人1年分100点で、背広1着50点、靴下1足2点。

朝の通学時間帯に電車が非常に混むようになってきたのを親が心配し、徒歩で通学できる近くの湘南学園に3年生の時（昭和18年4月）転校した。学園は当時1学年の生徒数が15～20人位で、放課後や休日には上級生も下級生も仲良く一緒に校庭を走り回っていた。校内の休閑地で各種の野菜を栽培し、収穫はみんなで分けあって持ち帰った思い出がある。昭和18年夏頃より学童疎開が始まり、昭和19年には各学年の生徒数も30人を超えるようになった。

昭和20年になると藤沢・平塚・鎌倉・横浜への空襲も激しくなり、4月には岐阜県大野郡丹生川村（現在は町村合併で日本一広い高山市）に母と2人で疎開した。村では、空襲警報のサイレンも鳴らず静かだったが、転校した丹生川国民学校での、出征兵士の留守家族の田圃での草取り、木刀の代わりに木の枝を振り回して行う軍事教練は厳しかった。小川での魚捕り、谷川で水遊び、鞍のない裸馬に乗せてもらうのも楽しかった。

敗戦については、8月15日の放送では良く聞き取れなかったが、村人の話を聞いて分かった。鶴沼へ帰れることがとてもうれしかった。9月に鶴沼に帰り、湘南学園に戻った。学園では、奉安殿撤去、賀来神社参拝中止、日本史・地理の教科書の焼却。そして二世の先生が教壇に立ち、英会話の授業がはじまった。昭和22年3月で国民学校はおわり4月からは新制の小学校と中学校になり、私も湘南学園の新制中学1年生になった。中学では加藤道子先生に数学を教えていただいた。先生のお宅には放課後みんなで押しかけアメリカの本や雑誌をみせていただき、世界への窓が開けた。先生は与謝野晶子さんの上から6番目のお嬢様。

（いけだ かつひこ）

昭和21年6月－23年12月の金銭出納簿

伊藤 聖 (会員)

手元に古びた黒表紙の「金銭出納簿」がある。祖母が毎晩（一部は私と妹で）、鉛筆で克明に記録していたものだが、いまや文字はすっかり薄れ、時代の証人というには、あまりに痛々しい姿を留めている。しかし私にとっては「飢えの時代」を思い出させるものとして、これほど切実な文字はない。

昭和17年10月、もともと病弱だった母が中学2年生のとき亡くなった。父は陸士出の軍人で、当時、中国北支に派遣されていた。一家の生計は祖母の瘦せた肩にかかってきた。戦時中はどの家でも、似たような耐乏生活だったが、敗戦とともに事情は一変した。のちに分かったことだが、父は関東軍隷下に転属して、ソ連参戦にそなえていた。そして、そのまま関東軍の将校団とともに、23年までモスクワ南方で抑留生活を送ることになる。

昭和21年6月の「金銭出納簿」によると、

- 1日 小麦粉 (1kg、2日分) 2円5銭
- 2日 魚 (さわら) 10円40銭、六会 1円20銭
- 3日 コンニャク 4円80銭、片瀬60銭
- 5日 魚 (さば、いわし) 5円76銭、野菜 1円80銭
- 7日 大麦 (3kg、3日分) 5円61銭、搗き賃30銭
- 9日 缶詰46銭、片瀬60銭
- 11日 加州米 (2kg、2日分) 3円84銭、玉蜀黍粉 2円40銭、大根 2円
- 13日 小麦粉 (8kg、7日分) 16円40銭

これが2週間に配給された食糧のすべてであった。大麦、小麦粉、玉蜀黍粉、馬鈴薯、魚粉、缶詰など、食べられるものは、すべて主食扱いで米に換算され、配給された。この21年6月の「食糧危機」がもっとも深刻であったと思う。六会、片瀬などの文字がみえるのは、食糧買出しの交通費である。

22年に入っても食糧事情は深刻で、夏休みが半月も繰り上げられた。それでも少しずつ改善がみられ、金銭出納簿にも「米7kg、104円58銭」(22年11月13日、同11月30日)の記載がみられるようになる。父が帰還したのは、さらにその半年後、23年夏であった。

(いとう さとし)

日本はこれでいいのか？

—私の戦中戦後史から—

植松民也（会員）

私は北海道中部の山間都市の生まれで、戦時中は小学生だった。「大東亜戦争」が始まったのは2年生の時で“大日本は天孫降臨以来万世一系の天皇を頂く無敵の国だ”と教えられた。この戦争に勝つとは思ったが、天皇が天から降ってきた現人神あらひとがみだとは、子供の頭でも信じられなかった。大本営発表では勝ち戦ばかりなのに、襟裳岬えりも みさき上空を北上して来襲する敵機が増加し、食糧の不足が深刻になってきた。食糧増産の掛け声で、山の上の原生林を開墾してジャガイモなどを植えたが、ろくに実らないうちに雪が降り出し、貧弱な収穫物を背負って凍った急な崖の道を下りる始末だった。山菜や野草なども、食べられるものは何でも食べた。

終戦は6年生の時で、重大な放送があるとかで学校へ行ったが、雑音の中から何か奇妙な声がきこえただけで意味がわからず、先生からも何の説明もないままに帰宅させられた。翌日からは今までと全く逆なことが、当然のように教えられたが、子供を殴って軍国主義教育をしていた教員たちからの反省の言葉は皆無だった。私の教育者や指導者等に対する不信感は、老年になった今も続いている。

昭和23年に津軽海峡を渡って内地（本土）へ来たが、戦前からの連絡船は全滅しており、この時乗った戦後新造の洞爺丸とうやまるは、数年後の台風で横転沈没した。

戦争末期の北海道は本土から切り離された状態にあり、終戦がもう少し遅れればソ連軍に占領され、ドイツや朝鮮半島のような分断国家になったといわれる。

その後の私は勤め人を早目に辞め、自分の目で世界を見ることを心がけてきた。

共産政権末期の東欧を旅して、東西ベルリンの壁を越え、南北朝鮮や千島・樺太などにも行った。西暦2000年には世界一周の船に乗って、戒厳状態のエルサレムを見、日付変更線に停船して世界最初の21世紀を迎えたことも忘れがたい。

昨年こととしの夏には広島と長崎の平和の灯をアテネのオリンピックや、ニューヨークの同時爆破3周年のセレモニー等に届ける船に乗り、また地球を一周した。

なぜ世界には争いが絶えないのか。直接的な理由は多様だが、その根底には限られた資源や食糧の奪いあいという事実がある。それが豊かな時には共存できるが、人口や消費とのアンバランスが高まると、殺し合いが始まるのである。

世界中の資源を浪費し、食糧の自給率が4割にも満たない日本の行く先には、きわめて危険なものがあると私は思う。

（うえまつ たみや）

風化することない戦争中の日々

佐藤 和子（会員）

七・五・三の千歳飴が鉛筆に代わり、大好きだった宝塚のレビューを観に行けなくなった頃から、子ども心にも、忍び寄る戦争の影を感じていたのかもしれませんが。だんだんとその足音が近づき一勝ってくるぞと勇ましく、と大声で歌って神風が吹くことを固く信じてその日を待つうちに、我家のお向いの家々が強制疎開ということで取り壊されていきました。京子ちゃんの家も、良ちゃんの家も…。それからは幼友だちと会うことはできませんでした。通学途上、機銃掃射に狙われてその恐ろしかったこと、決して忘れません。

学校が閉鎖されて、集団疎開か縁故疎開かということになり、母と私と弟の三人は東京麻布の家に留まる父を一人残して、遠い親戚筋を頼り、福井県の雪深い地に疎開しました。12月下旬、父がやっと求めて来た革(?)靴は、雪の中では直ぐ駄目になり、母がどこからか調達してきた地下足袋にワラを巻いて登校したのですが、帰りは凍える手で自分で巻かねばならず、学校へ行くのが苦痛になり、今でいう不登校の日々が続きました。疎開先はお寺の離れで目の前は墓地、部屋に畳は無くムシロを敷き、その上疎開先に送った荷物は汐留駅で全焼し、全く何も無い日々は辛いものでした。荒地を耕して作ったジャガイモの小さかったこと。東京育ちの母は二人の子を抱え、食べていくのに随分苦勞したことと思います。

8月3日、終戦を待たずして鵠沼の家に戻りました。持てるだけの荷物を背負い、途中何度か空襲にあって列車の外へ避難したりしながら、2日ばかりで空襲警報の鳴る上野駅迄たどり着いたのですが、出迎えに来た父はその荷物を見て、とても自分一人では持てなかった、と言ったそうです。母と私とで背負い、三歳の弟の手を引いて来たその格好、写真でもあったらなあと思ってしまいます。やっと着いた鵠沼の家にも又何も無かったのですが、冷たい井戸水のおいしかったこと。やっと親子四人で暮らせるようになって数日後、広島、そして長崎に新型爆弾が落ち、15日を迎えました。その日も外で遊んでいると、駆け寄って来た子が、「戦争終わった。日本が負けたんだって」と、知らせてくれたのでした。度重なる空襲と疎開、戦争していることの辛さを知ったかつての軍国少女は、ただホッとしたのをおぼえています。庭のオシロイ花の赤が印象的でした。それからずっと60年間、不戦の気持ちは決して変わることはありません。（さとう かずこ）

戦中・戦後を垣間見て

佐藤 久美子（会員）

私は福島県の海岸線の小さな田舎町、小高が生地です。1941年生まれです。私の戦争体験ということは、回りの大人の話題、体験者の話そのものです。終戦間近になって、空襲警報とか、グラマン、カーチス、ダグラスという小型機が13～15機列を成して、低空飛行で目的を捕えて発砲したという話です。私の家では、すぐ上の兄と姉が目掛けられた如く近距離から発砲され、2階の屋根、柱、襖に弾が貫通し、後日まで砲弾は出て、私はおそろしく思ったものです。

短期間疎開はしたものの、祖父母が病弱だったこともあり、すぐ家にもどり、一室の畳を上げ、床板を土間に貼り、暗幕を張り巡らし、防空壕として使用していました。貨車に積んだ松根油に掃射され、2昼夜駅方面の下町から黒煙が昇り続けた日時と同じ頃、立派な煙突がそびえ立つ珪砂（ガラスの原料）工場が、地響きと暗煙の凄さに、それが爆撃であるという記憶もあります。ヒマの種やら松根油を軍用機にでも使用しようとの試みとの話も聞きました。仙台空襲の夜のB-29は、グォーンという不気味な爆音と黒の集合体のような塊が整列して北へ向かって行き、間もなく夜空が燃え上がったのを見て、誰もが仙台が燃えていると思ったものです。

長兄は学徒動員先の宇都宮の中島飛行機で、理学部というだけで技術もない自分たちが飛行機を造るようでは「この戦争は負けである。」と思ったということです。軍備品を製造していると見なされた紡績工場、飛行場、列車は全部爆撃されたそうです。中学4年生が班長になり、出征した農家の手伝い、飛行場の塹壕造り等々グループでしたそうです。

南京で捕虜になり帰還された方が、「戦争が悪いのであって、日本人が悪いのではない。」とあって釈放してくれた周恩来の偉大さを話されたのを鮮明に覚えています。4年生の時、「今日から難しい國の字は、簡単に国という字になりました。」と担任からいわれ、他の小さなことと重なって妙な気がしたものです。脱脂粉乳給食も同じ頃に始まったと思います。

囲い、集団、縛られることが苦手で、何でも楽しみに変え、肩肘張らず、背伸びせずが私の生き方です。

（さとう くみこ）

生まれて最初の記憶

＝染みついたもったいない精神＝

佐 藤 弘（会員）

昭和20年、2歳半の私には終戦の記憶は無いが、私の最も古い記憶としては数年後の戦後の状況にたどり着く。

静岡県浜松で育った私の周りは私も含めて食糧事情が悪く、経済的にも苦しく、ひもじい生活をしていたと思われ、食べ物の思い出が私の最初の記憶である。

配給品を受取りに、遠い配給所まで夏の炎天下親につれられて歩き、家に帰って食べた進駐軍からのものと思われる、干しあんずと缶入りバターピーナッツの味は今もって忘れられない思い出を含んだ味である。

また、全焼した自宅の跡に建てたバラック住宅の空き地では、食糧確保のため農作物を作り、その畑仕事を手伝った記憶がある。父は素人ながら必要に迫られ、狭い庭で野菜は殆んど自給自足していた。そのためか、生産する苦勞を思うと、いまだに食事に出されたものは残さず食べるが、家庭菜園は昔を思い出しやる意思がないのである。

住んでいた近くには、旧国鉄浜松工場（現在は新幹線の整備工場）とその官舎があり、官舎の周りの埋立用として工場から産業廃棄物が持込まれていた。官舎に住んでいたお母さん達や子供は、その廃棄物の中らかねめのものを拾い、鉄くず屋に売り、家計の足しにしていた家が多くあった。私も時々、友達につきあい、遊びの合い間に鉄くず拾いを手伝った経験がある。

今もテレビで、東南アジアの一部では、ゴミ山の中らかねになるものを拾っている姿が映し出されることがあるが、その度に自分の記憶に重ねてしまう。

（当時の廃棄物は、コークス＝石炭の燃えカス＝の中に機関車や列車の整備で発生した電線の切れ端、鉄くず、銅パイプの切れ端、真鍮のバルブ、砲金のナット等が混じったものであり、生ものやビニールは無かったので、東南アジアでの今の状況とは少し異なる） お陰で、学生時代に金属材料を学んだ時には、基礎知識として役立ち、今もそれらの金属を見ると当時を思い出してしまう。

いずれの記憶も哀しいものが多く、今の生活の原点は戦後の混乱期とりわけ困窮生活にあり、もったいないという精神は悪いことではないが、状況上身に染みついた哀しいさがである。

（さとう ひろし）

高瀬の池の思い出

狛 倉 健(会員)

高瀬弥一が藤ヶ谷の豪邸を処分し、川袋の5,000坪の敷地に居を構えたのは大正9年のことだ。敷地の高台に母屋を建て、下の沢地に2,000坪の池を造った。弥一の娘である吉川八重子さんの「川袋の家の思い出」(本誌89号)によると「沼のように広い池には大小三つばかりの島があり、川舟が2艘……」とある。

筆者は弥一の長男の弥太郎と中学が同級であった関係で、昭和の6、7年ごろはよく高瀬の池に釣りに行ったものだ。すあま(餅状の菓子)を仁丹の粒くらいに丸めて針先につけて藻の蔭に下ろすと面白いようにキンブナ、ギンブナ、タナゴが釣れた。

昭和20年代は鮒釣りに凝っていた。新婚早々であったが、休日になれば台風であっても高瀬の池に通い詰め、母から「嫁さんと魚釣りどちらが大事か」と叱られた。これほど入れ揚げたので、35cmもあるマブナや大人の腕ほどもある大うなぎを激闘の末に釣り上げたり、いろいろの思い出があるが、これは鯉に釣られた竿の話だ。

新橋の釣具屋で「東作」の銘の入った鮒竿を、清水の舞台から飛び降りる思いで買い求めた。3月下旬の某日、高瀬の池でその竿の筆下ろしをする。勢い込んで来たのにさっぱり当たらない。一服しようかと竿掛けに預けてマッチをすろうとしたとき突然浮きが見えなくなる。あわてて掴もうとする手をすり抜けた竿は、池の真ん中を目指して矢のように滑ってゆく。そして、びっしり密生した藻の中に引き込まれた2間半(約5m)の竿は、柔らかい穂先を下に、握りの方をピシャン、ピシャンと2、3回空に放り上げられた後に動かなくなる。藻に絡めて釣り糸を引き千切ったその勢いで竿を跳ね上げたのだが、すごい瞬発力である。先ごろ釣りをしていると、向こう岸の近くでバシャンと大きな水音、見ると1mくらいの物体が水に落ちたところだ。瞬間、誰かが池に丸太を放り込んだと思ったが、あたりに人影はない。この池の主のあの鯉が跳ねたのだ。

大枚をはたいて買った竿が、小鮒1匹も釣らずに鯉に持ってゆかれたのでは話にならない。ついに意を決し、池に入って取り戻すことにした。寒かったが幸い深さは胸の辺りまでだし、水底は砂で足を取られることもなかった。

思い出深い高瀬の池も今では住宅地になり、当時を偲ぶよすがは何もない。

(ししくら けん)

戦中・戦後の学生生活

杉本辰夫(会員)

開戦を告げる「大本営発表」のラジオを聞いたのは、現在住んでいる鶴沼の家でしたが、その後父の転職にともない関西に転居しました。

転校先の中学に登校して驚いたのですが、昼の弁当は生徒全員が校庭で立ち食いするのです。雨が降って、やれやれ今日は座って食べられると思っていたら廊下で立ち食いです。

「おまえ達は学業を終えたら軍隊に入り戦地に赴かねばならない。戦いの場では、のんびり腰を下ろして食事などとんでもない。そのため今のうちから訓練しておくのだ」というわけです。一事が万事この調子でした。

そのうち学徒動員が始まり中学2年生以上は男女とも授業は打ち切られ工場で兵器など軍需品の生産に従事しました。

空っぽになった学校には教室に工作機械が運び込まれて「学校工場」となり、私はここで海軍の銀河（爆撃機）、紫電改（戦闘機）の外板を加工しましたが間もなく「学校工場」はB-29の焼夷弾で全焼、本工場は大型爆弾で壊滅、避難した防空壕では艦載機の機銃掃射とさんざんな目にあいました。

戦後昭和22年北大予科に進学して恵迪寮に入りました。

当時の学制（旧制）は小学校6年、中学校（女子は高等女学校）5年、高等学校3年、大学3年で予科は高等学校と同格でした。旧制高校の定員は国立大学とほぼ同数でしたから、より好みをしなければ国立大学への進学は保証されていたので入試勉強とは無縁の自由な予科生活を送りました。

寮は木造の2階建てでベッドと机の入った5人部屋が60室あり運動部、文化部など部活ごとに割り当てられた部屋に1、2、3年生が同居していました。

室内やトイレには「ニュートンも糞の落ちるに気がつかず」などの落書きが書き散らされていました。

寮費の徴収、新入寮生の選考、寮使用人（炊夫、賄婦）の雇用、給食など寮の運営は寮生から選出された委員会が取り仕切っていました。深刻な食糧難の時代で、食糧の買い出し、朝昼夕の食事を担当する生活部の委員は授業に出る暇もなく仕事に追われていました。こうした委員の自己犠牲に支えられて寮の自治は維持され、寮生活を共にすることで多くの寮生は終生の友を得たのでした。

（すぎもと たつお）

子 供 の こ ろ

高 田 清 祐 (会員)

昭和17年生まれの私にとって戦争の思い出は父母から聞かされた3月9日の東京日暮里での空襲、焼夷弾、防空壕の話によりなんとなくで、実際の記憶は戦後間もなく親戚の別荘に移り住んだ鶴沼から始まります。日本橋馬喰町で生糸の商売を営んでいた父にとって、戦後生糸の統制でやむなく趣味であった写真の技術を活かし銀座4丁目にあった進駐軍のPXでの写真現像・引伸しをうけおい、自宅に暗室を設け行き来していました。たまに一緒に東京に連れて行ってもらった都電に乗り茅場町、馬喰町での用事、銀座の不二家、オリンピック、資生堂パーラーで食事をし、ガリバー旅行記・白雪姫を見て銀座アスターの中華饅頭をお土産に帰りました。



ある夏の朝、母が裏の井戸に西瓜をつるし洗濯をしているそばで遊んでいると父が頭に包帯を巻いて帰ってきました。いつものように藤沢で満員の汽車に飛び乗った時から記憶がなくなったといえます。どうやら満員のデッキから線路に落ち気を失った父の頭の上を数台の列車が通り去ったようです。駅員が駆けつけて気がついたようで意識がなかったから動かずに助かったといっておりました。

近所の友達と皇大神宮のお祭りに出かけたとき、あの山車の人形が大きく見えて怖い感じがしたこと、私の家が境になって町内が違うからと祭の饅頭を貰えなかったことは忘れていません。

家の横道から数分、桃山の脇を通過して田圃を抜けたはず池は思い出いっぱいの遊び場です。人の知らない足がもぐらずに池の真ん中まで入っていける隠れ道、池に入って釣りをしていると足についた藻をつつくクチボソ、夕方池の周囲で身を伏せ待ち伏せて採ったヤンマ、途中から砂地で自転車を押し押し捜しに行った浜見山の葉莢拾い、初めて職人さんに作ってもらった布製の野球グローブ。

今の鶴沼の環境から思い出すのがだんだん薄れていくのは残念です。

(たかだ きよすけ)

想い出すままに

高塚正子（会員）

どんよりした空にキィー！と飛行機の音がした。バラバラに3機が飛び上がってきた。空港爆撃に失敗して逃げてきたなと思った。日の丸をつけた1機が追いかけてきた。思わず「来た」と叫んだ。追いついて空中戦が始まった。「負けるな！勝て」と手を握りしめて空を見上げた。敵機は煙を噴いて反転落下した。「勝った！」と躍り上がって喜んだ。「兵隊さんは、強いね」と弟が鉄砲を担ぐ真似をして嬉しそうに歩いてきた。ラジオの放送は「海ゆかば」の曲が流れることが多くなった。戦死、玉砕を報じた。やがて父も出征した。「お国のために戦います」と。母は私たちを守るために出征したのだという。父もまた戦死するのかも分からないと思った。戦争は早く止めて、父を帰してくださいと毎日神に祈り続けた。

ふかし芋をポンと割ったら、スジが5本も糸を引いて、バイオリンのようだなと思った。でも食べるところが少ないと思うと、涙がこぼれた。配給に赤くて長い米が来た。大豆、固いトウモロコシの粒、まだ口に入れることができるだけ良かった。軍の米倉庫が爆撃され、まだ温みが残っている焼け米が来た。ガラスの破片、砂利や砂、黒こげの米粒。たまには白い米粒があった。「これを人が食べるのですか。食べられますか」たまらなく腹が立って、お腹がぐうぐう鳴った。

空襲警報が5時までには解除になったら学校に行くことになった。老齢の先生が廊下にまで机や椅子を並べて教えられた。男の先生は兵役に、女の若い先生は徴用にとられたからだった。朝から学校に行きたい。友達と遊びたい。いつ戦争が終わるか知りたいと思っていた。学校へ着く前に警報が鳴って、駆け戻ってくる途中のことだった。畑の中の広々とした道路で、飛行機に追っかけられた。草むらの中に倒れ込んで、草に身体を伏せた。バリバリバリと石を削り打つような音がした。飛行機に吸い込まれるのではないかと恐ろしくて、何がどうなのか分からなくなった。二日ほどして、新聞に妊婦が機銃掃射されたと報じられた。私も母も、この記事を見て機銃掃射だと知った。恐くて恐くて、キィー！という飛行機の音が耳に残って困った。戦争は、大嫌い。お腹がペコペコも耐えられない。こんな恐くて悲しい思いは、二度と御免だ。口に出すことも、書くことも許されなかった遠い昔。戦争は絶対にしないでほしい。

（たかつか まさこ）

自分の戦後はいつ終わったのか

竹内 広 弥（会員）

戦争の最中の昭和 18 年、東京・世田谷で生まれた後、群馬総社に疎開した。鵠沼に移ったのは戦後の昭和 22 年頃。鵠沼の家に着いた時の裸電球のやけにまぶしかったこと、水道の蛇口をひねったら余りにも勢い良く水が出たことが忘れられない。鵠沼に来る前に半年ばかり世田谷の伯母の家にやっかいになっていた。冬のある日、従妹と二人で留守番をしていた時、コタツから煙がもくもく出て子供心に水をかけなければと思ったが水道の水はいつもちょろちょろで役立たず。二人とも何も出来ずに佇んでいた。そんなこともあって鵠沼の家での溢れるばかりの水の出方は強烈な印象に残っているのだろう。

二人の兄たちは世田谷の家で空中戦の様子を眺めていたという。自分の記憶は疎開先の群馬総社からのようで利根川の急流、赤城山中腹の寺が真っ赤に燃えた火事、石垣の下にオモチャの電車がかったという夢などだが、これらは後に家族から聞いたものが自分の記憶として残っているのかもしれない。三疊間に家族 5 人でいた世田谷の伯母の家でのこと、初めて鵠沼の家に来たときのことが自分の記憶の始まりかもしれない。

小さい頃の鵠沼の夏空には“天の川”が、くっきり流れていた。冬は寒く、良く日向ぼっこをした。海に行くと鵠沼橋近くの遊歩道路には進駐軍の外車やジープが停めてあり興味深げに眺めたものだ。その中に前と後が同じ顔をした乗用車があって、とても不思議であった。本当は同じように見えただけなのかもしれないが、その時はどうなっているのかと、あまり近くに寄って見るので「進駐軍に捕まってしまうぞ」と、周りに脅された。その頃、鵠沼海岸駅前の広場は格好の遊び場で、勇気あるものは松の木に登り「海が見えるぞ」と威張り、夏祭りには舞台が作られ、のど自慢大会、映画会などが催され、祭りの山車もでて、大いに賑わっていた。鵠沼海岸の商店街も今よりずっと活気があったような気がする。

やがて鵠洋小に通い校庭から米軍の DC3 機から続々と開く落下傘を眺めていた。3 年生ぐらいから給食になり「脱脂粉乳のミルクはアメリカから貰っている」と聞き“ミルクをくれる良い国—アメリカ”という思いを当時の作文に書いた。その時点でもう自分の戦後は終わっていたのかもしれない。

（たけうち ひろや）

私の終戦

竹田 祐紀 (会員)

昭和20年8月15日正午に放送された「玉音放送」を、私は疎開先で聴いた。「玉音放送がある」ということで、母と弟達とお隣の家族とラジオの前で直立したまま聴いた様な記憶がある。雑音が入って、非常に聞き難く、私には何も聴き取れなかったが、「戦争が終わった!」ということは解った。その途端、「もう逃げなくて良いのだ! もう死ぬことはないのだ!」という事が小躍りしたい程とても嬉しかったのを、今でもはっきり思い出す。その夜は、光が外に漏れないように電灯に掛けていた黒いカバーも外され、久し振りに家の中も華やいだ。翌朝、学校へ行くと、集団疎開で来ている友達が固まって泣いている姿が私にはとても不思議におもわれた。何故あの人達は泣いているのか? もう自分の家に帰れるのに? もう死ぬことは無くなったのに? 戦争に負けた悔しさ等私には理解できなかった。それよりも、爆撃に対する恐怖から逃れられた喜びの方がずっとずっと大きかった。小学校3年の夏だった。

昭和19年11月末の空襲で、東京に住んでいた家の近くの、芝大神宮の辺りに焼夷弾が何個も落とされ、我が家の小さな防空壕では危ないというので、芝公園の中にある国鉄の官舎のコンクリート造りの大きな防空壕に避難した。当時小学校2年生だった私は、警戒警報で学校から帰ってくると、ランドセルの中の教科書を出して、自分の机の上に置いてある非常食類を詰め替えて、それを背負って防空壕に避難することになっていた。ところがである。焼夷弾で焼かれた真っ赤な空を見た時、「逃げる時は必ずランドセルを忘れないでね」と言う母の言葉は私の頭の中には存在せず、芝公園の防空壕に再避難する時は、私は何も持っていなかったのである! それまで疎開を考えていなかった親は、このままでは子供を殺してしまうと思い、4歳の弟、19年2月に生まれたばかりの弟と私を連れ、母は京都郊外の父の実家へ急遽疎開した。翌日のことである。

終戦の数日後、家の近くにある駐在所の友達の家遊びに行った時、友達のお父さんが書類の整理をしていた。軍歌を口ずさみながら、家の庭で書類に目を通しながら、書類を細く裂いて燃やしていた。私達の顔を見ると「戦争に負けちゃったね。おじさんは悲しいよ」と話して下さった光景が今でも忘れられない。

(たけだ ゆき)

戦争の悲惨さを次世代へ伝えることを忘れまい

中川原 良子（会員）

父は卒業間際の院生で出征した。体格も人並み以上だったので、本来外地に出されても不思議はなかったが、子どもの頃より強度の近視で、内地の通信に従事し、戦うことなく終戦を迎える。父は軍の解散が遅くて、復学が思うようにいかず、二等兵であったにも拘わらず戦犯であって、取り敢えずのつमりの教職もうまくいかなかった。やがて高校の教諭にはなれたが、とうとう復学ならず、その後の人生大きく曲折があった。それでも一度も愚痴はいわなかった。多分、同じ人生を歩んできた人の、凄惨な出来事を考えると口にする値もなかったのだろう。

母は朝鮮の仁川で生まれ、軍の仕事をしていた関係で、一般社会では手に入らなかった物も不自由なく、東京の学生生活を送っている。母の話を知ると、戦時中とはいえ、楽しい青春時代である。人間はどんな時代でも、他人より自分の環境が恵まれていると、時代の印象も随分違ふらしい。戦死した人もなく、食べることに事欠かず、空から爆弾が降ってくることもなく終戦を迎え、さすがに引き揚げ後は大変だったらしいが、母たちは若かった。立ち直りも早かった。

いつの頃からか薄れゆく戦争の記録を残そうといわれ出した。それ以前はどうだったのか、教師から特別に話を聞かされたこともなく、私のように親からの話もない。私が戦争の悲惨さを遅ればせながら知るようになったのも、ここ20～30年ではないだろうか。小林千登勢さんの引き揚げの話、海老名香葉子さんの東京空襲の話、高木敏子さんの『ガラスのうさぎ』、『はだしのゲン』あるいは生協が取り組んだ戦争を聞き取る、伝える等々。戦争を体験した人々の生の声が一番人の心を打つ。その声が、人の数からいえば減りつつある。少なくなった声を、耐えて生きてこられた方々は、私たちの今のために亡くなってしまった方々のため、文でなり生の声で次の世代へどうか伝えてほしい。親は子へ、子は孫へ。私のように戦争から間もない時代に生まれた年代でさえ、戦争があったことは知っているが、戦争の悲惨さが分からない。若い世代では戦争があったことさえ知らないという。憲法9条を丸暗記させられた中3時代があったのに、この頃何だかおかしい。日本に限らず世界の人々の幸せが二度と失われることのないように願ってペンを置く。

（なかがわら よしこ）

叔父の戦死

原 雅 子 (会員)

母の弟である叔父が海兵を出て、潜水艦でニューギニアに赴任中に米艦に撃沈され、戦死した。昭和19年1月のことだ。赤子の私を抱いた叔父の写真があるが記憶には残ってない。母が生存中、しきりに話して聞かせてくれたので、自然に海兵68期の慰霊祭と遺族会に出席するようになり、叔父と同期の生存期友たちに会うようになった。

卒業生の約70パーセントが戦死だったが、特殊潜航艇に乗り組みパールハーバーで座礁し、同僚は即死したものの、自身は幸運にも失神し、日本の捕虜第一号となった酒巻和男氏も出席されていた。当時戦後50年を過ぎていて、かなりの年配になられ健康もそれほど優れてはいなかったようにお見受けした。それでも捕虜のことについて何度も何度も言い訳のように、生きて帰ることはできない、死のうとばかり思っていたのだと話された。生きていらただけで羨ましいことだと私などは思えるのだが、戦死した同胞への心遣いもあるとはいえ、それほど時間がたっているのに、生きて捕虜になったことを気に病まねばならないことだったかと、私は胸が苦しくなってしまう。作家の故豊田穰氏も海面を一週間漂流したのち捕虜となったが、戦死した友のことを書かれた著書「同期の桜」には叔父のページもあり、私には貴重な記録になっている。そして叔父を知る期友の方から、叔父の話を経々聞く機会にも恵まれた。その中で江田島のことがしばしば話題にのぼり、是非訪ねるようにとすすめられて数年前に行ってきた。

今はミュージアムになっている講堂の美しい建物は、見事な満開の桜並木のあいだに輝いていた。その建物に一步足を踏み入れたとき何か胸に迫るものを感じたのだった。その二階には戦死者の名前を彫った石版があった。そこで叔父の名を探し始めたがなかなか見つからず、やっと見つけたときには、その文字が涙でかすんでしまった。つづいて、長い校舎のような学生会館の前に立ってみると、どこかに叔父がいるように思えて、さらにまぶたの裏から湧き出てくるものを抑えることができなかった。そして多くの死んでいった若者たちへの鎮魂の思いをこめ、平和を希求する気持ちが私のうちに充滿した。二度と戦争を起こさない賢明さと平和を願ってやまない意思を持ち続けねばならないとあらためて強く思った。

(はら まさこ)

戦中の思い出

宮澤 彰（会員）

私は高座郡藤沢町鵠沼2206番地で昭和4年に生まれました。記憶にない昭和7年に満州事変が始まりました。ここからが戦中でしょうか。

ハッキリ覚えている小学校入学が昭和11年、翌12年7月が日中戦争勃発です。ここからかも知れません。当時の鵠沼小学校への通学路は、大部分が人通りの少ない松林、竹藪、畑、桃畑など、人さらいが出るといわれるほど淋しいところでしたので、私は藤沢小学校に入学しました。^{ナンキン}南京陥落の提灯行列、昭和15年の市制施行と皇紀2600年が重なり、国威発揚の国家行事も盛んに行われました。戦勝ムード一杯です。私はその中で漫画『のらくろ二等兵』の出世と共に甘い戦争を見ていたようです。昭和16年12月8日、太平洋戦争が始まり、翌年に小学校ではなく国民学校を卒業しました。

藤沢市鵠沼819番地の中学校に入学。この頃から戦争を意識するようになっていました。家の前を通る東京螺子^{らし}の工具さんが増えてきたり、日本精工が畑の真ん中にできたりしてきました。中学校の制服も、あこがれていたものと異なり、衣料切符を使って配給を受けました。スフ製の国防色、ボタンは金色でなくガラス製のもの、ズボンにサイドポケットがない（何故だ）という代物でした。ゲートルの巻き方を覚えても、スフ製ではすぐにずり落ちてしまいます。学校には3～4名の陸軍将校が配属されていました。週2回の軍事教練、富士山麓での1週間の野外訓練、横浜港近くの海洋訓練と、軍事教練一色です。さらに文部省からグライダーが支給され、早速滑空班が新設されて、訓練生に選ばれて滑空訓練です。校庭は狭くて飛べず、分解された滑空機をリヤカーに積んで鵠沼海岸へ運び、毎日将来の戦闘機乗りを夢見て飛んでいました。まさに軍国少年です。日毎に激しくなる戦争、農村動員、綾瀬航空隊^{えんたいごう}の掩体壕造り、昭和19年には工場動員、そんな中で私は鵠沼を出ることもなく、自宅からの通学通勤でした。親元を離れることもなく、大した戦争体験もなく、中学生生活の一部として過ごしたように思います。平塚・茅ヶ崎・小田原と空襲が続き、今度は藤沢かというところで8月15日です。江の島・片瀬山には砲台・陣地跡がありますが鵠沼にはありません。戦争の跡などない静かなところであることを今後も願いたいものです。

（みやざわ あきら）

私の昭和二十年

山本高雄（会員）

昭和19年4月、家から程近い第一師範付属小学校に入学できた。夏休みの宿題の絵日記は、アメリカ兵を潜水艦風の鮫が、今にもパクリとする姉の絵や、日の丸戦闘機が出撃する兄の絵など、兄姉総動員で一挙に完成された。楽しい時期も、秋の深まりとともに、警戒警報のサイレン、夜空を駆け巡る探照灯、遙か上空の敵機など、毎日の生活が慌しくなった。やがて、敵機を撃ち落すことも出来なくなり、地平線のかなたに、火の雨が注がれ、あたりが真赤に明るく輝いた。

千葉から一つ目の駅に降り立った母は、私を連れて、夜道を親戚に向かって歩き出した。結核療養所の建物を過ぎると、灯り一つ無い田んぼ道をひたすら歩んだ。周りは鬱蒼と繁った森が続き、ふと見上げた茜色の空を、雁が一行になって飛んでいった。やがて田畑も尽き、お寺に続く鶉の森にさしかかる。周りは更に暗く、時折頭上の鶉が甲高い声を出し、足を鈍らせる。遠くに集落の明かりが見えた時は、ほっとした。正月を挟んで一人ぼっちで、4軒の親戚につぎつぎお世話になる第一歩の幕開けであった。小湊鉄道で五井から30分走った小さな町に、上の兄と、妹、母の四人が一つ屋根の下に集まったのは、春、桜も散りだす頃だった。父と姉は外地におり、上の兄達二人は、東京で大学生活を送っていた。

西の夜空が真っ赤に燃え、紙のようなものが噴き上がって、暗い方角へどんどん飛ばされていった。翌日、そこら中に燃えた紙片が散らばっており、半分燃え残ったお札も風の中を漂っていた。

学校への通学路は、T字路を下がってゆく。下り道は土手で盛り上がり、下を小川が流れていた。「土手に伏せろ!」との声とともにグラマンが機銃掃射を浴びせて飛び去っていった。弾痕は道を外れて走り、誰も怪我をすることはなかった。

ある朝「捕虜がきたぞ」との声で廊下を飛んでいった。空教室に3人の兵隊さんが白人を連れて来た。授業後、もう誰もいず、食後の脂の匂いが残っていた。

小学1年生の記憶は、ホテルの光のようにふわふわと不確かで、周りから固めていかないと、一列に並ばない。夢だったか現実だったか確かめようがない。

2年生の夏、母の実家のお盆の日、鬼火が出るよと、こわごわ墓地の中を進んで行った頃、日本が敗戦を迎えていたのだろうか。（やまもと たかお）

物 心 と 戦 争

渡 部 瞭 (会員)

物心がつくと、鵠沼にいた。そして、戦争の最中^{さなか}だった。そこは、原の地藏堂の隣り、「鵠沼を語る会」会員の榛葉^{はしば}昭市氏の屋敷内にある離れである。

私の生まれは東京で、2歳までは世田谷の太子堂で育った。そして軽度のくる病と診断され、日光の豊かな鵠沼に転地療養したのである。当初は榛葉家の筋向かいにあるT家に間借りし、間もなく榛葉家の離れに移った。どうやら、ここまでは物心はついていなかったようだ。どんな家に住んでいたか記憶にない。榛葉家の離れは現在取り壊され、芝生と四阿^{あずまや}になっているが、今でもその離れの間取り図を描けといわれれば描いてみせる自信がある。

昭和19年の秋、3歳の末に弟が生まれた。「産めよふやせよ」の時代である。しかし、栄養価のある食糧は手に入らず、母乳が足りなかった。20年になると頻繁に艦載機が飛んでくるようになった。そうした中、毎日乳母車に一升瓶を載せて少し離れた乳牛を飼っている農家に出かけた。弟のために牛乳を5合購入してくるのである。ある日、途中まで来ると、警戒警報抜きでいきなり空襲警報が鳴った。と、向こうから艦載機が超低空でやってくる。身がすくんでしまい、乳母車の陰に隠れるのがやっとだった。通りがかりの大人が、乳母車ごと長屋門の下に押し込んでくれた。それと同時に目の前を数メートルごとに砂煙が上がり、機銃掃射が通り過ぎた。遠くで男の人が倒れた。死んだと思ったが、貫通銃創で済んだと聞いた。これが私の脳裏に最も鮮やかに残っている戦争の記憶である。

5月の横浜空襲は、殷々たるサイレンが鳴り響く中、B-29の大編隊がかなりの時間をかけて東に向かい、やがて北東方向に黒煙が上がり、夜になっても赤々と見えたこと、翌日には大八車やリヤカーに家財を満載した焼け出された人々の列が通ったことを覚えている。



榛葉昭市少年と筆者 (1945冬)

湘南中学生だった榛葉昭市少年は、弟のように私を可愛がり、艦載機が襲来すると、「あれがグラマンだ」などと教えてくれた。

(わたなべ りょう)

学 徒 動 員 回 顧

浅 沼 正 城 (会 員)

戦時色が徐々に強くなった昭和16年以降20歳以上の成年男子は軍事要員として兵隊に召集され、わが国は労働力不足となった。これを補充するため中高大学生に“お国のため”…勤労働員という名目で初期には我々湘南中学(旧制)の3年生以上にも近郊の農村六会長後と出征兵士の出た農家に春秋の農繁期手伝いに行ったのがその発端である。だんだんとその地域は広がり、平塚の在郷辺りまで行った。日数も増え、泊まり込み動員させられた記憶がある。芋掘り麦刈りなどの他に厳寒の頃暗渠排水(二毛作するための土地改良)工事(幅0.5m、深さ1.0mの溝を延々と掘る)…それはキツイ作業だった。

戦況も益々厳しくなり、ついに常時動員=片手間勉強という事態になったのが昭和19年6月頃か、割り当てで軍需工場に派遣され、直接間接軍需生産に従事することとなった。誰がどこへ行ったかは知らされず、噂話から日本精工(軸受)、相模海軍工廠寒川分工場(毒ガス?)、東京螺子(ネジ部品弾身薬莖等)に動員された。私が派遣された東京螺子(現:ミネベア)では、最初に青年学校の教室を使用し、基本作業の指導訓練を受ける(講師は工場職員)。仕上げ作業(タガネ、ヤスリ等の基本作業など)は現場でその当時渋谷班長、高木・小川指導員から厳しく指導を受けた記憶がある。勤務は二交代制(早番=7時~14時作業、14時~15時授業・遅番=13時~14時授業、14時~21時作業)が暫く続いた。早番遅番をどうやって決めたのか不明。

出勤は藤沢駅南口に地域別に集合、隊列を組んで当時はたんぼ道を、また退社時は工場講堂前に集合、隊列を組んで…とにかく常に集団行動だった。工場内をウロウロすることは禁止、他の人たちが何をやっているのか全く分からなかった。何回かの空襲警報で新林の裏山に掘られた何か所かの防空壕に避難した。ただ工場の食堂の給食の雑炊が、腹が減っていたのでうまかった記憶がある。

配属先は第4工場(一番古い工場)、屋根は鋸歯状の屋根で採光換気は良くなかった。我々7~8名が配置され、大型ターレット旋盤(6種類の刃物で作業)でターンバックル(飛行機の操縦桿に関わる部品)の一部を作っていた。機械動力は電動機(10~15馬力)からプーリー軸にそれぞれ10~20台の旋盤を駆動する方式で、電

動機のベルトが切れるとその群の機械は全部停止する状態がしばしばあった。そして作業服が油まみれとなり、家へ帰っても家中油の臭いが充満した。こうした作業が続く中、途中軍人志望で海兵・陸士に入隊する同窓生が3～4名いなくなり寂しくなった。こうして私も昭和20年3月卒業で東京螺子の学徒動員を終了した。

欧米の生産施設・軍事力を知っていた人たちは、戦争突入に反対したのは当然で、われわれは何も知らず、知らされず、ただお国のためと猪突猛進にこの動員時期を過ごしたことに今更ながら空しさを感じる次第である。

(あさぬま まさき)

戦 災 の 記 憶

浅 野 陽 子 (会 員)

「もどきなさい！」母の絶叫で、防空壕に向かって走り出した私は踵を返して家に戻った。母と弟と三人で押入れに逃れた。艦載機が家の真上を旋回し、邸内の椎の木林に爆弾を落としたのだ。幸いなことに防空壕に避難した兄たちや使用人は全員無事だった。父は玄関の片隅にしゃがみこんで難を逃れた。頭の直ぐ上の壁には爆弾の破片が突き刺さっていた。どれ位の時間がたったのだろうか。爆音がおさまリ、そっと押入れの襖を開けると八畳間の部屋は土ほこりがもうもうと湧き上がるように舞っていた。4歳の私にはこの記憶のみが脳裏に焼きついていいる。首や羽がとんだ鶏が30羽ぐらい飛び散っていたこと、爆風で二つあった玄関のひとつがなくなっていたことなど、後年兄たちの話で知った。鵠沼で唯一爆弾を落とされた家といわれて育った。米軍の航空母艦から飛び立った艦載機が、藤沢航空隊の飛行場を偵察した後、爆弾を我が家に置き土産として落としていったといわれている。7月末、敗戦直前の被災であった。

戦争に反対し投獄され、拷問までうけ、それがもとで頑健だった父の身体は蝕まれてしまっていた。戦後の農地改革前に、小作人の方々に土地を無償で提供した父。市会議員であった父は、合併前の片瀬町所有の軍の隠匿物資の材木を無償で払い下げを受けた大手建設会社会長兼藤沢市長を追及、調査委員会が設けられ、市長は辞職した。その父は私が4年生の秋(昭和25年10月)、いわゆる「藤沢中央劇場問題」を糾弾する演説直後議場で倒れ、そのまま40歳の若さで帰らぬ人

となった。死を信じられぬ私は、毎夕家の前の砂利道にしゃがみこんで帰らぬ父を待った。

今日も厚木基地から横須賀にむかって米軍の最新鋭機スーパーホーネットが大爆音を立てて飛ぶ。キャンプ座間への米第一軍団司令部の移転（新司令部設置）、原子力空母の横須賀配備が現実化されようとしている。日本はどこへ向かうとしているのだろうか。（あさの ようこ）

第二次大戦敗戦前後の我が家

穴山 雄一（会員）

私は、昭和14年1月東京麹町で生まれた。父は祖父・祖母と共に東京矢来町に住んでいたが、母との結婚を機に近くの麹町に居を移した。祖父は山梨県出身で、養蚕業を営んでいたが、明治時代の終わり頃東京に出てくるとほぼ同時に現在の鵠沼海岸三丁目付近一帯2000坪ほどの土地を買い、別荘として使っていた。昭和4年に小田急線の藤沢一江ノ島間が開通したが、これによって穴山の土地は松が岡側（現在穴山菌科のあるところ）と商店街側とに分断された。商店街側は全くの松林で、昭和27年頃までずっとそのままであり、私が子どもの頃よくターザンごっこなどして遊んだものである。

祖父は別荘としてこの土地を年に数回しか利用していなかったのに、小田急線が家の前を通るので、電車の音がうるさいといって、新たに第二の別荘として海岸側（現在の二丁目）に400坪ほどの土地を求めた。実際に家が建てられたのは昭和10年で、現在我々が住んでいる家である。この家は、当時の流行であったらしく、和洋折衷で、地元の加藤大工さんの先代に施工してもらった。特に日本間は念入りで、障子の棧はすべて面取りが施されている。総檜造りで、70年たった今でも全く狂いがなく、出入りの大工さんから「あと100年は住める」とお墨付きをもらっているのだから、絶対に火を出さぬよう、大事に使っている次第である。

昭和18年、東京麹町にいた我々一家と、牛込にいた祖父・祖母・叔母は、戦争がひどくなって東京にいては危ないということになり、揃って鵠沼海岸二丁目の方に疎開することになった。ほぼ同時期に父が兵隊に行くことになり、中国に出征した。父32歳、。当時としては老兵の方であった。私4歳の夏のことであった。

鵜沼海岸での生活が始まると、まず大きな防空壕が造られた。空襲警報が鳴るたびそこに飛び込んだ。食事もできたし、寝泊まりもできた。その頃一番怖かったのは、火だるまになった飛行機が我が家に向かって飛んできた、いや落ちてきたときである。もうおしまいかと思ったが、頭の上すれすれに飛んで、海の方へ落ちていった。翌日、近所の人話では、米軍の飛行機で、江の島沖に墜落したとのことであったが、実感としては、本当に自分にぶつかってくるように思えた。

昭和20年になると、2月、3月に東京が爆撃され、5月には横浜、7月には平塚が火の海となり、夜空が真っ赤に染まったのが家の庭からよく見えた。だんだん近づいてくる。次は藤沢かと毎日毎日怯えていたのであるが、ついに藤沢には大した空襲はなかった。これといった軍事施設のない藤沢には、爆弾を落としてもしょうがなかったのであろうか。それにしてもサーチライトで照らし出されたB-29の大編隊は凄かった。日本軍も高射砲でばらばらと応戦するが、全く弾が届いていない様子であった。

敗戦も近い頃、我が家に日本の兵隊さんが10人くらい駐屯していた。とてもやさしい気のいい連中で、規則正しい生活をしていたし、私も随分可愛がってもらった。後で聞いた話だが、米軍が湘南海岸から上陸してくるので、それを迎え撃つためということであった。

当時、日本軍の宣伝で鬼畜米英といていたので、私は米国人は赤鬼のような顔をした恐ろしい人たちを想像していた。婦女子は乱暴されるとの噂で、髪を切れということで、母などは男のように断髪し、もんぺをはいていた。それにしても日本刀と小銃くらいしか持っていない日本の兵隊さんたちは本気で我々を守ろうとしたのだろうか。戦争が終わってしばらくしてから海岸へ出てみたら、米軍の大艦隊が相模湾の海という海を埋め尽くし、海の面さえ見えない圧倒的な兵力で、悠然と浮かんでいた。後にも先にも、また映画でも、このような大艦隊は見たこともないものすごい数であった。あの時、我が家にいた日本の兵隊さんと比べると、余りに彼我の差が大きく、ただただ茫然とするのみであった。

昭和20年8月15日、祖父が家族全員をラジオの前に集めた。玉音放送が始まると、皆泣き出した。私にはなぜ大人たちが泣くのか、良く分からなかったが、どうやら戦争に負けたらしいということだった。その直前に新しい爆弾が落とされて沢山の人が死んだということ、最初は広島で二発目が長崎で、これが沢山落とされたら、日本は全滅してしまうという話が出ていた。したがって、日本の敗戦は子どもの目から見ても明らかだった。

その年の4月、私は小学校1年生になっていた。最初は藤沢第三国民学校に通っていた。学校まで遠いので、近所の子どもたちが10人くらいずつ組になって登校したが、組同士の喧嘩がしょっちゅうあった。一番チビの私はそのような時、すぐ麦畑に隠れて喧嘩が収まるのを待つのであった。戦争が終わって、2学期が始まる頃、第三は遠すぎるので湘南学園に転校した。まだ戦争気分が抜けきらない頃、担任の女の先生が左の端の生徒から順番に将来何になりたいかを聞いた。男の子は皆、軍人と答えた。私も当然のように軍人と答えた。すると先生は優しく“もう軍人にはなれないのです。その考えは棄てなければなりません。”と諭された。そこで初めて、“ああ、戦争は本当に終わったのだ”と子ども心に実感したのである。

非常に厳しい生活が始まったのは、戦争が終わる頃からであったと思われる。とにかく食べ物がないのである。主食は少量の米と麦・サツマイモ・ジャガイモであり、それにアワ・ヒエ・トウモロコシなどを混ぜたもので、とても食べられた物ではなかった。肉類はほとんどなく、魚類は海が近かったので魚屋が多く、アジ・サバ・イワシなどが食べられた。米は配給だったので限られた量しかなくどんなものでも、どんなにまずくても、泣きながらでも食べざるを得なかった。

食べ物がないので、家の庭はすべて畑と化した。主にサツマイモ・ジャガイモ・葉菜類であるが、カボチャ等のつるものはすべて縦に伸ばし、屋根の上に実らせた。そのようにして耕地面積を稼いだわけであるが、屋根の上の作業はほとんど私が一手に行った。サツマイモは乾燥薯にして保存食にするわけであるが、干している間に一つ減り二つ減り、出来上がる頃にはほとんどなくなっている始末であった。

肥料は今から思えば肥料効果の薄い人糞と時々鶏糞だけである。人糞は便所から天秤棒で担いで柄杓で撒くわけだから、家中臭くてたまったものではなかった。母は銀座十字屋楽器店の二女で、全くの都会育ち。畑仕事などやったこともなかったはずであるが、毎日の畑仕事は母とお手伝いさん3人と私の5人でやったのである。しかし、畑で穫れるものは種類も量も季節も限られたものであり、微々たるものであったので、母はしょっちゅう自転車で買い出しに出かけて行った。現在の小田急線長後あたりまで、物々交換に行ったのである。自転車の前籠に私を乗せ、後ろの荷台には母が嫁入りの時持ってきた高級な和服を乗せていた。帰りの後ろの籠は、米・芋等食糧満載で、大変な重量になっていたのも、自転車がよく倒れた。自転車が倒れるたびに私は道路に放り出されたのである。

畑仕事といい、自転車での長距離買い出しといい、お嬢様育ちの母が私たち3人の子とも祖父、肺結核の祖母と叔母をかかえ、死にものぐるいで働き、必死に生きた姿は今でも絶対に忘れることはできない。

昭和21年、穴山家にとって思いもかけない農地解放という事件が起こった。穴山家の先祖は、戦国時代武田信玄の24将の筆頭で、御親戚衆といわれた穴山伊予守で、甲府の南側、御坂峠の近くにある小山、穴山城(現在では石垣しか残っていない)という城の城主であった。徳川時代は豪農として甲府の南側一帯を管理していた。祖父の時代には、生糸の生産を主に行っていたので、回り中桑畑で、沢山の小作人を抱えていた。しかし、明治時代の終わり頃、事業を手広く進めるため、東京牛込に出てきてしまったので、甲府の方は不在地主になり、政府に取り上げられるというのである。祖父は毎日毎日床柱に頭をぶつけて困った困ったを連発していたが、しばらくして母と妹を地主として甲府に送り込んだのであった。

私も小学校2年生の夏休みに1ヶ月ほど甲府で母と一緒に暮らした。大きな農家で、土間には牛や馬が何頭かいて、2階は蚕の飼育室になっていた。桑の枝の大きな束を大量に投げ入れると、ザーザーと蚕が葉を食べる音がして、まるで波打ち際にいるようであった。

田舎暮らしを楽しんでいるそんな折、祖父が息せき切って甲府にやってきた。父が中国から復員してくるのを我々に伝えるためであった。我々は急ぎ鶴沼海岸に帰って父を迎えた。父は痩せ細って、元気に出征していったときとは別人のようであった。父は戦争に関する話は一切せず、何を聞いても全く話してくれなかった。私が大人になってもそれは変わらなかったのも、戦地でよほど酷い目にあったのだらうと想像するしかなかった。父は戦争へ行く前は安田銀行に勤めていたが、これからの時代は食料に係わりある会社が良いという祖父の奨めもあり、肥料を作っている三菱化成に勤めることになったのである。

甲府の土地は色々な苦労も水の泡、結局政府に二束三文で買い取られ、多くの小作人たちに分け与えられた。

戦後すぐ祖父に連れられて東京牛込の家を見に行ったが、見渡す限りの焼け野原に黒こげの金庫がぽつんと亡霊のように立っていた。この土地もただ同然で売り払われた。

小田急に分断された鶴沼松が岡側の土地は、祖父の弟に譲られ、現在歯科医院として孫が立派に受け継いでいる。

商店街側の松林だったところは、昭和27～28年頃多数に分譲され、今では50坪ほどしか残っていない。あと残ったのは、現在我々が住んでいる鵠沼海岸2丁目の家だけになった。

父が会社に勤め始めたことでわが家の戦後は終わった。

戦争によってわが家は多くのものを失ったが、その代わりに平和という何物にも代え難い大きな財産を貰った。おかげで戦後60年たった現在まで幸せな生活を送らせて貰っている。

それにしても、戦争とはいったい何だったのだろうか。戦争に行き行って亡くなった人、残された家族の人たち、爆撃を受けた人、家を焼かれた人、戦争は無数の悲劇を生んだ。私の世代は戦争の空しさを小なりといえども体験したほぼ最後の世代であろう。

今現在も、世界の各地で戦争やテロが行われ、尊い命が失われている。いつになったら人類は戦争を止めることができるのであろうか。(あなやま ゆういち)

海の家でダンスパーティー

内 田 英 一 (会員)

昭和21～22年頃の初夏、私が主催してダンスパーティーを開催したことがあります。助っ人は後輩の岸君、鈴木君(早大生)、バンドは斎藤兄弟のハワイアン・バンド(慶大生)。歌はハワイ帰りの渡部女史。当時としては学生バンドとはいえ、なかなかムードのあるものでした。

会場は鉄道省海の家で、無料で貸してくれました。

手書きのビラを何枚か作り、鵠沼海岸駅付近、横浜銀行、旧郵便局、一本通り、天金付近に「入場整理料 10円」と明示して当日の2週間前位に張り出したと記憶しております。

当日は大盛況で、終いには入りきれず、また、進駐軍の兵士がトラックにビール持参で乗り込んできたのには驚かされました。

入場者数は、多分200名位いたのではないかと思います。

場内は人いきれで暑く、見知らぬ婦人と薄着を通しての踊りは、学生の私にとっては大変に悩ましいものであったと憶えております。

演じ終わって会場を清掃し、慶応バンドその他の方々に応分の謝礼を払った残りが700～800円ありました。

これには私も驚きました。

何しろラッキーストライクが一箱20円の時代ですから、学生の身にとっては大金です。当時関係しておりました鵠沼青年会（鵠青会）に寄附したのではないかと思います。（うちだ えいいち）

私の戦中・戦後

～思い出すままに～

有田 裕一（会員）

私は1937年生まれであるが、同年代の人より、幸いにも戦争の怖さ、悲惨さを知らない方の部類であると思う。疎開の経験もなくこの鵠沼に生まれ、鵠沼で育った。勿論戦後のララ物資による学校給食は、最初から経験しているし、教科書も、藁半紙に印刷されたものを自分で切って本にしたこともある。戦争の恐怖を目の当たりにしなかったのは、我が家の西側の松林の中に町内の防空壕があったり、庭に掘った手製の小さな防空壕があり、空襲になると早々とその中に入れたので、鵠沼の上空で高射砲で撃たれたB-29が、4つの火の玉になって相模湾に墜落した話も見ることにはなかった。その後浜辺へ行って銀紙のテープを拾っておもちゃにしたのも思い出の一つである。

戦時中我が家では、町内の警防団の団長をやっていたので、店の一角がその場所になっていて、何かことがある度に招集がかけられ、集まった団員の氏名をどこかへ電話で報告していたのも耳に残る。また、シンガポール陥落のニュースがラジオで流れた時、皆で万歳していたのも、子どもながらに日本は勇ましいんだという意識を強くした光景だった。

我々は昭和19年の入学なので、1～2年の間だったと思うが、近所の小学生が一団となり、上級生が先頭で隊旗を持ち、二列縦隊で、歌だかかけ算の九九だかをうたいながら、第三国民学校（鵠沼小学校）の校門の中まで順次入り、「南海岸第何班何名」と、到着を報告したものである。戦争の状況が厳しくなった頃、学校への通学（勿論徒歩）が危険となったためか、我々は南海岸クラブでの勉強となることがしばしばで、面倒を見るのも先生でなく、5、6年生だった。

その頃だったと思うが、南海岸の鉄柱でできた火の見も供出され、小田急線も下り片瀬江ノ島行きの線路が外され、単線になった。線路の両側には溝があり、カエルやオタマジャクシ、トンボが多く見られ、時々はその山側にあった大きな別荘の池から水路を伝って逃げ出した魚たちもよい獲物であり、線路は子どもたちのよい遊び場になった。

恐い経験といえば、学校の帰り道、今の鵠沼桜が岡郵便局の前の道はなく、本鵠沼から海岸へ二つめの踏切から、新田道の交叉する点（今の郵便局と鵠洋小学校の間の）まで、斜めの道であり、両側は全て畑で物陰はなかった。一人での下校中、急にP-51戦闘機が急降下してきた。思わず道と畑の間の溝に飛び込んだのであるが、弾丸が畑の中へズバズバ撃ち込まれて行く音が聞こえた。

そんな思いの戦争体験も、天皇の玉音放送で終わりを告げるのであるが、この時も家族が大事な放送があるからと、全員自宅の玄関の前に出て、店の斜め前がラジオ店で、その店の前へラジオを出し、近所に聞かせたのを、大勢で揃って聞いた。

戦後60年を経、多くの記憶が遠くなる中で、今回「鵠沼を語る会」の企画により、初めてこの時代の自分を記録する機会を与えられたことに感謝したい。

（ありた ひろかず）

私の八月十五日

河野 顕子（会員）

60年前の8月15日、私は神奈川県横須賀市秋谷で迎えました。小学校1年生であつたこと、両親はじめ8人の兄弟姉妹が怪我もなく無事に終戦を迎えられたこと、家も焼かれず壊されずと、あの時代の都会に住む日本人の中では、恵まれた家族だったのでしょうから、記録に留めるほどの事かどうか迷いましたが、8月15日の時報と戦没者追悼式が始まりますと、思い出される出来事がありました。

我が家の庭に、故障し動けなくなった（交換する部品もなくもちろん燃料も無い）乗用車が雨ざらしになって放置されていました。戦時下、金物は供出させられていたわけですから、車の存在を軍は放置出来ず没収するつもりで、15日の午前中、陸軍の兵隊さんが2名来られたのでした。（車を運ぶ車が軍にもなく、手

を焼いていたようです)。車の周りを上へ下へと見てまわり、父と話をし、帰ろうとされたのですが、父が12時に玉音放送があるのでそれを聞いて帰るよう促し、応接間に入られました。

そこには、我が家のたった1台のラジオがあり、兵隊さんと父母、姉兄私弟（2歳）でその時を待ちました。

いよいよあの放送が始まりました。直立不動の兵隊さんが突然泣きじゃくり、大粒の涙を流して止りません。私はただただびっくり…。もちろん両親も涙を流して居りましたので、放送の重大さを感じ取ることが出来ました。

父は兵隊さんの前で、姉兄に戦争が終ったこと、「これから大変だけど新しい日本を作るために頑張るんだよ!」といいました。

そして、父は兵隊さんに「ここでお弁当（もちろん粗末なもの）を使ってお帰りなさい」とお茶など出したのですが、涙々で食事がノドを通らない感じで、車のこともそのままで、肩を落として帰って行かれた姿が今でも目に焼きついています。

そして、それから十数日後でしょうか、2階の窓から海を見ると、相模湾に米軍艦が次々と入って来ました。空襲警報は無くなっていたのに、真暗な夜の海に、マイクで交信する英語のやりとりの響きの不気味さ、恐ろしさ……これからどうなるんだろうという不安な気持ちを子供心にも抱いたものです。

あの時ご一緒した兵隊さんは、その後どんな人生を歩まれたのでしょうか。私にとって、終戦の日の玉音放送は、兵隊さんお二人の姿といつもダブって思い出されるのです。

（この あきこ）

或る没落した家の話

岡 田 哲 明（会員）

私が生まれた昭和8年は、日中両軍山海関で衝突、関東軍熱河省に進攻、日本は国際連盟を脱退。ドイツではヒトラー内閣が成立した。国内では言論、思想弾圧が強化され小林多喜二は獄中虐殺され、野呂栄太郎が検挙された。第二次世界大戦の予兆という大きな社会変動のうちにあって、私の幼年期は平穏であったといえるであろう。

本家は代々、白木屋岡田徳右衛門（城山三郎『創意に生きる一中部財界史』の冒頭に登場する）と称し、美濃紙、麻を扱い、いわゆる「清洲越十人衆」といわれた豪商の一人であり、碁盤割の名古屋城下町に広大な家屋敷を構えていた。筋向いの分家が我が家で岡田良右衛門を名乗り、本家と同業であったが祖父の代には不動産収入など資産運用のみを行っていた。父は八高から東大を出て銀行員、母は市内の木綿問屋の娘で東京女子大卒、資産家のインテリ夫婦であった。私は、姉を筆頭に男四人、五人姉弟の四番目。五人には一人ずつ専任女中が付くという言わはお坊ちゃまとして育った。

昭和16年、そのような優雅な日々が一変する。小学校は国民学校と改称され、名古屋市立大成国民学校二年の二学期も終わる頃、太平洋戦争が勃発した。当初は威勢がよかったものの、やがて戦況はジリ貧状態。衣料、食糧、あらゆる物資が欠乏しはじめ「欲しがりません勝つまでは」という標語が流布された。

ついに敵機が本土上空を犯すに及んで学童疎開が始まる。縁故先の無い私は弟と集団疎開にいくことになった。昭和19年8月5日、大成国民学校の3～6年生男女212名は「中京学童集団疎開第一陣として警報下、防空服装も凛々しく小さなリュックサック、風呂敷包に生活の簡素さを偲ばせて…（中部日本新聞1944, 8, 6付）」母校を出発、三重県桑名郡多度、七取の両村へ向かった。

親元から離れての慣れない集団生活は困惑と悲慘の毎日であった。深刻な栄養失調、慢性下痢、蚤、虱の蔓延、親の来ない面会日の寂しさといったら無い。

昭和20年3月12日、名古屋大空襲。我が家には無数の焼夷弾が直撃し炎上焼失、14歳の長兄は防空壕で焼死。家族は母の実家に厄介になるが19日に再度空襲。岐阜の親戚に身を寄せる。8月15日、炎天下、私は七取村の法泉寺前庭に学友と整列し敗戦の玉音放送を聞く。疎開解散、岐阜の家族と合流。翌々年冬、17歳の姉は学徒動員の過労がもとで結核死。父は関西に単身赴任。

農地改革で所有の田畑は小作人の手に渡り、新田切り替えと急激なインフレに唯一残った自宅の地所も家族を養うため手放すことになる。昭和22年、やっと名古屋に10坪余のバラック住宅を借りた。以後、社宅暮らしが続き、父は退職まで、ついに持ち家を持つことはなかった。戦災と戦後の社会構造の変革は、350年続いた素封家を無一文にした。没落の挙句、二人の愛児をも失った両親の無念は察するにあまりある…戦争憎し！

（おかだ てつあき）

東京最後の空襲の日の体験

小林 政 夫（会員）

昭和20年3月10日の下町大空襲の様子を杉並の家で眺めていたが、次は杉並方面がやられると思い、杉並の家には、父一人を残し、茅ヶ崎に疎開した。

5月25日急用が出来、午後3時頃茅ヶ崎を発って東京へ向かった。当時、国鉄では遠距離切符の発売枚数の制限があったので小田急を利用した。細かい時間の記憶はないが、電車が多摩川を渡りしばらくした時、空襲警報が発令され徐行運転となりついに経堂駅で運行打ち切りとなってしまった。

やがてB-29の爆音が聞こえはじめ焼夷弾の雨が降り出した。一束に束ねられ、途中で傘型にひろがり燃えながら落ちてくる様は、離れていれば花火を見るような状況でも、頭の真上で破裂した焼夷弾が、ザアーと言う物凄い音と共に落ちてくる時の恐怖は何とも言い様がない。次々に落ちてくる焼夷弾に追われ、焼けていない方へとがむしゃらに逃げた。

逃げ惑う先に油脂焼夷弾が落ち、破裂して火のついた油脂が飛び散り、周りの家々が燃え出した。火消し棒などでは手の施しようもなく、荷物を抱えた人たちが右往左往していた。私は火の中を通り過ぎるために、道に落ちていた毛布を拾い、防火用水の残り水をひたし、防空頭巾・上着・ズボンにたっぷり水を含ませ、火の中をかいぐって歩いた。

いつの間にか夜になっていた。初めての場所、しかも火災の中。道を聞けるような状態ではなく、勘を頼りに新宿と思われる方角にむかった。どこをどう歩いたのか幸いにも見覚えのある道に出たと思ったら東北沢の親戚の家の傍だった。付近は焼け残っていた。おにぎりとお茶をもらい、少し休ませてもらってから、自転車を借りて杉並の家へ向かった。

空襲警報は解除されたが、火はまだくすぶり、道には焼け焦げた家具などが放り出され通れない道もあった。途中見分けもつかないような黒こげの焼死体をいくつも見つけた。薄明るくなった頃、青梅街道にたどり着いた。ここから北側はるかかなたまでの焼け野原の光景を目にし、我が家もだめだと感じた。たどり着いた我が家は灰になっていた。幼友達が焼夷弾の直撃を受けて亡くなったことを聞いた。焼け跡に一本立ち上がった水道管から水がちょろちょろと流れ出しているの

が侘しかった。親戚に自転車を返し、何とか部分開通した小田急を乗り継ぎやっと帰ってきたが、そういえばまる一日一睡もしていなかったが気にならなかった。16歳だったから。茅ヶ崎の家では、母親と妹が、一晩中寝ずに真っ赤な東京方面の空を眺めて、心配してしてくれた。

(こばやし まさお)

戦争に重なる顔

桑原玲子(会員)

私は東京淀橋で生まれ、昭和15年に鵠沼海岸駅前に引っ越してきました。間もなく鵠沼小学校(当時は藤沢第三国民学校といった)に入学。1年生のカバンは厚紙を固めたようなものでできていたと思います。靴はなく、下駄さえも薄くなったものを割れないように履いていたのを覚えています。朝は現在の鵠沼郵便局の前あたりに集まり、6年生が竹竿に吹き流しのようにつけた布に「第五分團」と書いたのをかついで、そのあとを1年までの下級生がついて学校まで歩きました。鵠沼小学校まではかなり時間がかかったと思いますが、主に、堀川のたんぼ道、麦畑、モモ畑の間を歩きました。校門を入り奉安殿に頭を下げて、教室に散っていきました。正門の右手はぐるりと桜の木。花のあとに小指の先ぐらいの赤紫の桜んぼがなります。それを食べるのは禁止されていましたが、男の子は禁を破って食べました。男先生は、怪しいのを捕まえると、真っ赤なペロを出させて“ゴツン”をやりました。低学年の頃は、結構のどかだったと思います。敗戦近くなってからも警戒警報はあっても、空襲警報は短時間で、すぐ解除になりました。夜空の遠くの方に米軍の爆撃機が飛んでゆくのを、一、二回見ました。庭にかなり立派な防空壕を造りましたが、駆け込むことはありませんでした。

——父を監視する男——

終戦になるまでには苦しいこともいっぱいありましたが、特に私が受けたつらい悲しい日々を記したいと思います。私の父は淀橋で東京交通局のバスの運転をしていました。そして東京交通労働組合の支部長をしていまして、その労組から推されて当選し、淀橋区議会議員になりました。が、その頃の政府は、アジア諸国への植民地支配と侵略行為を繰り返し、戦争への機運が強まっていたときでした。“アジア諸国民と日本国民を不幸にする戦争をやめよ”というビラを労組が

中心となり、全国一斉にまいた―人民戦線事件―で逮捕拘禁されました。1年余の獄中暮らしの後釈放。藤沢・鶴沼に來たのです。が、その後もずっと監察付きということで、定期的に特高が見廻りに來ていました。私はその特高の名前も顔も今でもはっきりと思い出します。四角い顔、チョビ髭、ずんぐりした体つき……。『○○○』父と母は憎悪を込めてその名を呼んでいましたが、男が目の前に現れるや、下にも置かぬもてなしをしました。その姿の異常さは、子ども心に暗い思い出として焼き付いています。

配給の食糧は不足していましたが、農村出の父と母は、朝早くから夕方うす暗くなるまで畑仕事をして、イモ・麦・野菜などを作っていましたので、何とか食べ物はありました。そしてそれなりの一家団欒もあったのです。だが特高のその男は、いつもそれを壊しにやってきました。「やあー」と男が現れると、ゾーッと家中の空気が冷えました。上がり端に男が腰をかける、冬はそこに火鉢があり、かけてあるヤカンをずらして手をかざし、ぐると家の中を見回すのです。父は何をしても仕事を中断して、その男の前に座ります。と、必ず父の横に母がピッタリと座りました。

「どうかね戦局は――」

「まあねえ」と父。これ以上父が何かしゃべろうとすると、母はそっと後ろから父をつついて合図しました。“余計なことをいえば検挙される”からです。男はしばらく世間話のあと、きまって家の中を眺めまわし、「やあめずらしいものがあるな」といいました。母は「どうぞどうぞ」といって、その貴重品を涙をのんで包み、持たせて帰すのが常でした。男は子どもの私の目にも、家の大切なものをせびり取っていく憎い男でした。

――父の涙――

戦争が終わって男はピッタリと来なくなりました。終戦の日からどれくらいたったか、ある日外から帰ると、部屋の中の父と目が合いました。「玲子」と呼ばれたその顔が、目が怒るでもなく笑うでもなく“思い余った”ような目でした。「今なあ、治安維持法と特高警察の廃止の放送があったんだよ」といい、国のやり方や特に戦争に反対した人間をこの法律で捕まえ、留置し、拷問したり、釈放になっても年中家に監察に來た、ああいうことがもうなくなるんだと涙をにじませて話してくれました。ぶっきらぼうな父でしたが、子どもの頃から質問したことにはいいねいに答えてくれる父でした。

(くわはら れいこ)

私の戦中戦後史 軍国の乙女物語り

11歳～16歳までの少女時代

永井久子（会員）

日中戦争は始まっていましたが、当時国民学校6年生だった昭和16年12月8日朝、突然の大本営発表“本8日未明帝国陸海軍は西太平洋上に於いて米英両国と戦闘状態に入れり”子ども心に大変なことと思いました。真珠湾…その後連戦連勝のニュース、翌年2月シンガポール陥落旗行列提灯行列に国中が湧きました。しかし4か月後、6月ミッドウェイ海戦で日本海軍は壊滅的な打撃を受けてしまいました。私たち女学生は、何も知らされないまま唯一途お国のためと一生懸命でした。勝利の日までと歌いながら、学徒動員で海岸で塩作り、湿地改良の暗渠排水、風船爆弾の和紙作り、電波探知機の真空管作りetc.あらゆる作業に駆り出されました。工場は狭く、全員で作業はできないので交代で日赤へ行き、看護教育を受け、学校ではモールス信号・手旗信号の訓練を受けました。勉強どころではなく、敵国語ということで英語は勿論、外国文学を読むことも禁じられました。戦局は日々に陰しく、サイパン玉砕、マリアナ諸島は占領され、本土空襲が始まりました。私の町静岡も20年6月17日夜から未明にかけての大空襲に家も学校も工場も皆焼け落ち、従弟は焼夷弾の直撃を受けて即死し、猛火の中を逃げ惑って命を落とした多くの人がありました。一面の焦土と化した後に累々と放置された焼死体を目の当たりにし、60年経た今もその光景は脳に焼き付いています。死体には蠅が群がり、町内で唯一焼け残り戦災者食糧配給所となった我が家の土蔵で、私たちは蚊帳を吊って食事をしました。蠅は病原菌を運び、腸チフス・赤痢等の疫病が流行りました。父と姪が亡くなりました。食糧もなく、焼け残った衣類を野菜に替え、配給の高梁のむすびで飢えに耐えました。その間も空襲は続き、艦載機の機銃掃射に逃げ惑いました。広島・長崎は別格ですが、大都会に劣らぬ打撃を受けた地方都市がいっぱいありました。そして8月15日戦争は終わりました。しかし、戦後の窮乏生活は続きました。唯一の救いは、兄二人が無事復員してきたことです。後に結婚した主人は、樺太の国境にいて、敗戦後シベリヤに抑留され、極寒に重労働を課せられていました。水のような粥を掬ったという匙が今もあります。思えば小学校・女学校と一度の修学旅行もなく、唯お国のためと生きていました。そんな中、友人と楽しかった苦しかった辛かった思い出など、今は

皆懐かしいです。これが私の少女時代の一齣です。敵味方の別なく庶民に悲惨な
思いをさせる戦争は、絶対に阻止しなければと思います。（ながい ひさこ）

落書き

中島 明（会員）

父母の実家のある信州松本に縁故疎開で過ごした終戦前後の5年間の出来事は
今でも脳裏に焼き付いて、終生忘れられない。

その中でも、心の片隅に埋火のように残るほろ苦く、恥ずかしく思い出される
ことがある。それは終戦後の20年か21年の、暑い夏が過ぎて涼しい秋風が吹き始
めた頃だったと思う。それは当時松本市立清水国民学校生だった私が、親友の村
田君と連れ立って、松本の中央にそびえる松本城に遊びに行った時のことである。

天守閣に登り、北アルプスと美ヶ原高原に囲まれた松本市街の素晴らしい眺望
を楽しんだ後、隣の小天守に移ってふと天井を見ると、羽目板にいくつかの落書
きがあった中に、「我こゝに登れり、〇〇〇〇」と氏名まで書かれたものがあった。
なにかこの落書きが堂々としていてかっこ良く見えて、ちょうど村田君が蠟
石を持っていたので、「俺たちも書こうよ」ということになり、窓枠に足を掛けて
天井の太い梁によじ登り、金釘流の字で「我こゝに登れり 清水国民学校〇年
一組村田〇〇、中島明」と書いた。下に降りて天井を眺めると、不思議と何か北
アルプスの山を征服した満足感を覚え、国宝という重要建造物に落書きしたとい
う罪の意識は全くなかった。

翌日は熱が出て学校を休んで、その翌日登校したら、村田君から「落書きした
ことが分かり、先生から叱られて、放課後消しに行くことになった」といわれた。
この日、どの先生からも私に対して何らのお咎めもなく、拍子抜けで、一人だけ
叱られた村田君にすまない気持ちで一杯であった。授業が終わって早速バケツと
雑巾を持って松本城に登り、落書きを消した。落書きをした時も、消しに行った
時も、城中に守衛や見張り人を見かけず、あちこちに落書きがある野放しの状態
で、国宝の管理どころではないという、終戦直後の異常な状態であった。

現存する城の中で、完成された形で残る最も古い城として国宝に指定されてい
る松本城に落書きすることは、軽犯罪どころではない罪として、両親共々厳しく

お叱りを受けるところ、戦後の混乱で何のお咎めもなかったのである。

私は現在たまたま、3年前より「藤沢市文化財保護推進委員」を委嘱されており、鶴沼地区の市指定文化財が落書きや悪戯で損傷されないよう定期的に見廻っている。皮肉にもそんな私が60年前に市の文化財どころか、国の重要文化財に落書きをしたことにただただ恥じ入るばかりだが、その贖罪として、平和な今こそ大切に、先人の遺した貴重な文化財を子々孫々まで伝えるよう微力ながら尽くしたいと思っている。

(なかじま あきら)

青い空と真っ赤な翼

渡部 かほり（会員）

4歳の私は静岡県榛原郡中川根村藤川というお茶畑の村にいた。東京で文部省の美術研究所に勤務していた父が、突然、宮内庁御料林の管理を命ぜられて家族4人（父・母・姉小6・私）で疎開と称して、昭和18年から知人の紹介で農家の離れの茶部屋に住んでいた。

藤川には鉄道がなく、今でもSLが観光列車として走っている大井川鉄道の川根徳山という駅を下車して徒歩で30分ほど歩いてしか行けない山奥の村で、大井川にかかる長い大きな釣り橋を渡らなければならず、陸の孤島であった。斜面に点在して家があり、世帯数は50戸もあったであろうか。

昭和20年6月19日。静岡大空襲の日のことだった。空は青く晴れていた。蜂の羽音のようなブーンという爆音。B-29の銀色の編隊が空高くキラキラと輝いて何十機も飛行していた。富士山を目指して毎日のように飛来するB-29は、静岡上空で90度方向転回して東京方面に向かうのが常だった。

この日は警戒警報のサイレンが鳴らず、村人は農作業の手を止めて、防空壕にも入らず空を眺めていた。防空頭巾をかぶっている私の手を母がしっかり握って、母も私も空を見上げていた。

その時、2機の戦闘機が谷間の村上空に、低空で突然飛来してきた。あれよあれよと見ているうちに空中戦を繰り広げ、2機は体当たりし、バリバリという音と共に空中分解。2機とも翼がもげて真っ赤に燃えながら、キリキリ舞いしなから落ちてきた。

村人は固唾を吞んで見つめていた。翼に星のマークの戦闘機からは、2つの落下傘が大井川をはさんだ向こう側の村に降りた。日の丸のマークの戦闘機からは落下傘は降りて来なかった。眺めていた人々は誰も声を出さず沈黙していた。

あの時の青い空と爆音、真っ赤に燃える翼が脳裏にやきついて、映像も鮮明である。私はブルブル震えながら母の手をギュッと握りしめていたことだけは、60年たった今でもしっかりと覚えている。

この時、父は英語が話せたので、通訳を命ぜられ隣村に出向き、2人の米軍の兵士の取り調べに立ち会った。村人は捕虜の兵士たちを丁重に扱ったそうだと。終戦後10年以上過ぎた時、米軍の兵士の一人が村を尋ねて来て、村人の応対と通訳者にお礼を言う為に来日したという後日談を父から聞いた。

そして、この日が静岡大空襲の日であったことを知ったのは、私が成人してからのものであり、父がなぜあの山奥で仕事をし、家族が疎開していたのかも、この時知ったのだった。

二度とあのような光景を見たくない。決してつくってはいけない。

(わたなべ かほり)

銀シャリへの夢

綿谷克延(会員)

あの忌むしい太平洋戦争が始まったのは昭和16年12月8日、私が千葉市内小学3年生の時でした。朝早く臨時ニュースで大本営発表があり、我が大日本帝国は米英両国に対し宣戦布告を発したと父から聞かされた。学校でも朝礼で校長先生から戦闘状態に入ったと発表、当時の私たちは幼いときから大きくなったら兵隊さんになり、お国のために尽くすのだと教えられ育った。学校も尋常小から国民学校に変わった。戦争は当初機先を制し、真珠湾攻撃から大東亜圏内は連戦連勝、占領地区の島々に日の丸の国旗が地図に貼られ、提灯行列で歓呼の万歳が続いた。しかし、昭和18年頃か、物資節約に統制令ですべて配給制度が施され、欲しがりません勝つまではの信念に老若男女は増産体制に入り、赤紙による召集令状が頻発、加えて志願で出征軍人が毎日駅頭で万歳三唱、天に代わりて不義を討つと歓呼の波が続いた。私の兄も大学卒業と共に令状で高射砲隊に入隊、昭和19年頃から戦況極めて不利になり、連日空襲警報発令、灯火管制が発令されても軍国教育

で日本は神国であり、元寇の乱の時のように日本には神風が吹き、必ず勝つと教えられ、信じていた。食糧は日増しに逼迫し、麦飯の中に芋、大豆が大半となり、おかずはいらないから銀シャリを腹一杯食べたい夢を子ども心に思っていた。

学校給食は味噌汁のみで、弁当持参できない生徒もあり、給食もやがて中止、空襲は連日熾烈を極め、昼間の空中戦もしばしば垣間見られ、米国人が落下傘で降下逮捕、目隠しで捕縄連行されるのを見た。昭和20年3月国民学校卒業は、アッツ島・硫黄島の玉砕と東京大空襲焼け野原などの余波で卒業式の記憶は忘れた。中学通学も比較的体格の良い私は、学校から航空学校へ行くよう指示され、試験当日は連日の大豆飯に下痢気味で、体力テストで若干粗相した苦い思い出が忘れられない。指名中4名位合格した。4月から入校。寮設備がなく、毎日戦闘帽にゲートル、軍隊服姿で約3km位を通学した。上級生の姿が恐ろしく、教官は軍刀を下げ、毎日訓練。失敗は一蓮托生で厳しい懲罰を科せられ、1年生は敬礼に終始した。空襲は益々激しくなり、学校を狙う機銃掃射の弾は目前に穴の列。P51グラマン機の操縦者が低空飛行で撃っているのが見え、半ば戦場体験。しかし、昭和20年7月7日夜半、千葉市街地はB-29の焼夷爆弾攻撃で航空学校も完全焼失。見渡す限りの焼け野原。避難壕で苦しみを耐え、出た道路には真っ黒い焦げた焼死遺体は烈火を物語る。悲惨なありさまは未だ忘れられない。学校は必然的に解散。我が家は父の生まれ故郷、栃木の田舎村に引き揚げ、疎開生活が始まるも、農家とても銀シャリの夢は遂果て得ず。雑穀生活は戦後もしばらく続いた。

(わたや よしのぶ)

特 攻 隊

榛 葉 敏 行(会員)

「遂に神風特別攻撃隊攻撃員となる。全人生残り30日にして人生駆足に入る。出撃を前に自分は一個の人間である。偉人でもなければ愚人でもない。善人でもなければ悪人でもない。あくまで一個の人間である……………」

これを読んだ時、私たちの二、三年上の人たちの多くが国により自らの命を私たちのために死んでいったことは、何ともやるせない気持ちで一杯になった。当時、国民皆兵の時代であったから、健康な人であれば兵隊に行くことは当たり前

で、死することはある程度やむを得ないこととと思っていた。陸軍は幹部候補生、海軍は予科練と、中学3年の頃より多くの若者が志願した。特に予科練は、“若い血潮の予科練の 七つ^{ぼたん}釘は桜に錨 今日も飛ぶ飛ぶ霞ヶ浦にや でかい希望の雲が湧く”と血湧き肉躍るような歌であった。入隊後は血のにじむような訓練で、下士官がバットを持って見守っていた。辻堂に海軍用地があったため、商店街を隊列を組んで走る姿はよく見た。落伍者が出ると下士官のバットが飛ぶとはよく聞いていた。このような厳しい訓練は、すべて戦場に於いて組織で行動しなければならなかったためであろう。これを卒業した人たちや、さらに最高学府を半ばにして学徒出陣した多くの若者が戦場へと送り込まれたのである。

ミッドウェイ海戦、台湾沖航空機戦で多くの搭乗員を失った海軍は、着艦訓練にも1回に3～4機の事故と犠牲者を出す訓練で、死ぬ位なら爆弾を積んで敵艦に体当たりする方が良いのではないか。これが特攻の考え方である。私たちの年代には、命令ではなく、自らの意志で100%の死を選んで戦場に飛び立つ姿や、ニュース映画で見る特攻機が燃えて敵艦に体当たりする姿は、ただただ頭が下がるばかりである。さらに特攻回天がある。世界に誇る93式魚雷を、改装した長さ14.7m潜水艦に6基積んで敵艦近くで母艦と絶縁され特攻する。

このようにして多くの若人は太平洋の華と散ったのである。せめて私どもは生涯を通じて戦死した多くの先輩に哀悼の意を表したいと思う。

(はしば としゆき)

鵠沼から高松へ

細 谷 縫 子 (会員)

60年前、鵠沼6803番地に住んでいた頃、松の木も今よりずっと低く、二階から眺めると、遠くまで見え、富士山も見えていました。辺り全体にのんびりとした空気が漂っていたと思います。私が3歳くらいだったので、当然だったのでしょうか。そんなある日、二階の出窓で外を眺めていた私達（母、妹、いとこ）の目の前を松の木すれすれに、飛行機がダダダと大音響をたてながら通り過ぎました。叔父が「危ないじゃないか！」と怒鳴りながら飛んできて、私達を納戸に頭から入れました。そのパイロットは大きな目がねをし、白いマフラーをなびかせ

後方の人が機関銃を撃っていました。鶴沼は危ない、とのことで、四国の高松に疎開しました。高松で空襲に会い、高橋（たかはし）の下に祖母、母、妹、女中さんなどと身を隠し川の水につかりながら、遠くの夜空に高松が燃えているのを見ました。花火工場に火が付いたようでした。お寺から逃げていくお坊さんの袈裟が風になびき袖が大きくふくらみ、杖や編み笠がオレンジ色の炎を背に真っ黒のシルエットになっていたのが目に焼きついています。シュルシュルという焼夷弾の音、常に上空でゴーツという不気味な飛行機の音など、今も耳に残っています。母に手を引かれ、高松の特攻隊飛行場へ、母の従兄弟にお別れに行ったこと。お兄さん方が可愛がって下さったこと。宿舎の二階から流れてきたえもいわれぬ美しい音色、それがギターの音であったことは、ずっと後で知りました。幼いながらも淋しい空気を感じました。母に聞きましたら詫間海軍航空基地とのことでした。三人乗りの飛行機とのことで、従兄弟の友人、東大生の田中中尉は、「我これより突入す」と編隊を組んでいた従兄弟に電信を送り突入されたとの事でした。母が2人に白い絹のマフラーを送り、それを持っていらしたとの話です。従兄弟はエンジントラブルで奄美大島に不時着し、終戦を迎えたそうです。アルバムの田中中尉さんを見ると胸がつまります。沢山の犠牲の上に今の私があることを忘れてはいけない、申し訳ないと思い続けています。そして2度と戦争が起きないよう訴え続けて行こうと思います。

（ほそや めいこ）

焼夷弾の雨の下で 一横浜大空襲体験記一

六 浦 美智子（会員）

昭和20年5月24日午後10時過ぎ空襲警報が発令され、25日午前1時過ぎかと思う。上空に米軍機から落とされた火の塊が分散するのを近所の方と眺めていると、「焼夷弾だ」との声に、バケツを取りにと動いた瞬間、体中炎に包まれた。その熱の激しさは、命の終わりかと思った。油とゴムが混じり、火となって体中に燃え広がり、余りの熱さに防空壕でもみ消そうと壕へ走ったが、扉が閉められていた。顔に燃える油脂に声を出すことができず、「そうだ、防火用水だ」と気付き、用水に飛び込むと、瞬時に火は消えた。家の中はごうごうと燃えさかり、その中に祖父、今日か明日かという死期の迫った祖父がいる。傷んだ手でバケツを持ち、

水をかけると小さい火は面白いように消えた。火傷した顔が火にあぶられてヒリヒリと痛み始め、家から逃れてしまった。空を見ると火のついた焼夷弾が揺らめいて落ちてくる。米機の進行と反対方向の火の见えない方へトボトボと歩んでしまった。丘の上の小学校(私が卒業した)は、広い広い麦畑に囲まれている。たどり着くと刈り入れの終わった畑に沢山の人が避難していた。学校は火焰を上げて燃えさかり、防火壁が無用に起立していた(後で聞くと、駐留していた軍隊の馬が、火に驚いて駆けだしたとのこと)。夜が白みはじめると、私の状態に気付かれた人々により、リヤカーに乗せて東神奈川駅近くの市陽堂病院へ運んでいただき、家へも連絡してくださった。

入院して5日目の5月29日、眼が傷つかなかったことにホッとしたのも束の間、空襲警報が発令されると同時に「ザーザードカン」という音と共に病院に焼夷弾が落下した。「歩ける人は各自逃げて」と大きい声が聞こえ、母は布団1枚、私はスリッパのままで、火のない所から所へと逃げ歩き、とうとう力尽き、家屋の疎開跡に座り込んだ。

母と焼け死ぬと覚悟したが、周囲の家屋が焼けて熱風にさらされ、焼けた建材、トタン、火の粉が飛び交う小さい空き地の20~30メートル先に、川とはいえぬ泥川があるのに気付いた。焼け死ぬとしても今の状態から少しは楽になりたくて、川へ滑り降り、膝までの水に肩まで沈むことができた。昼というのに沢山の家の燃える煙で暗闇になり、兩岸の家屋が焼け落ち、川に崩れ落ちはじめた。沢山の人が泥川に逃げ、川幅一杯になった。一番終わりに町の警防団の年輩者3人がバケツを持って川に入られ、泥川の水を火の粉や焼けた落下物をものともせず川幅一杯の人々に「頑張れ、頑張れ」と声を掛けながら浴びせかけはじめた。これだけ頑張ったのだから、戦争にはきっと勝つと17歳の世間知らずの私は、立ち上がる気持ちで一杯になった。何かもう今日一日が終わったような時間に思えた。後で発表されると、五百何十機で1時間半の空爆だったとのこと。火と煙が収まり、明るくなって岸へ這い上がったときは、30日の朝のような気分だった。川の中の人々も皆無事で、ドブネズミ状態で地面に出た。しかし、私の眼は再び見えなくなり、スリッパはどこかへなくなっていた。母が川の端から不揃いの下駄を拾って、家が焼けてから借りたアパートへ歩いて戻った。焼け跡には逃げ切れず焼け死んだ人たちの死骸もあったことだろうが、見えぬ目には見ることもなく済んだのは幸いとも思う。

あれから60年。川で活躍してくださった3人の警防団の方々もすでに亡くなら

れたと思うが、何かの折に懐かしく思い出し、人々に秘められるヒューマニズムをその3人の方に覚えさせられていただいている。(むつうら みちこ)

戦争の思い出

矢田健爾(会員)

私は1933年昭和8年の東京生まれ。

太平洋戦争が始まった時は藤沢に引っ越してきて、小学校2年生だった。それから3年生の頃は軍国主義教育が盛んで先生から「びんた」をもらったことがある。私が級長で、皆を整列させておかなかったという理由、だから納得できない上に、大人が思い切り、ひっぱたく、その力は子供には、痛さと響きが限度を超えた。藤沢本町小学校である。当時は第四国民学校といていた。どこの学校にも奉安殿があり、教育勅語なるものを収めてあり、学校の儀式の度に校長が白い手袋で恭しく取り出し、朕思うに、我皇祖こうそうとのたまった。子供は下を向いていなければならない。歴史教育といえは天皇の系図を暗記するぐらいのものだった。4年生になったら、郊外から材木を担いできた。学校用の薪運びである。5年生になると、いよいよ食料がなくなり、母親が着物を持って善行の農家に買い出しに行っても、今日はこれだけだったといって1籠の茹でた小粒のジャガイモがその晩の夕食だった。子供5人の家族で、足りる筈もない。その内、母が「情けない」といって泣きじゃくったことを、昨日のようによく覚えている。父は「外に食べに行こう」といって子供を連れ出したが、玉半ではうどんを粒にしたようなご飯しか食べられなかったが、当然のどを越さなかった。学校では“欲しがりません、勝つまでは”と教えられていた。いよいよ戦争が激しくなり防空壕に飛び込んだ。どこの家でも穴を掘っていた。敵機襲来というサイレンで学校も早引けだったが、途中、一本松の大ガードの所まで来た時、頭上に江ノ島を目印にグラマン戦闘機が低空飛行で飛んできた。走る子供めがけて兎でも撃つように機関銃の掃射、機上の兵隊が見えた。急いで途中のトンネルに駆け込んだ。線路に跳ね返る弾の音が鋭く響いた。後で聞くと神戸君という友人がこの時撃たれて一生杖を突いて歩かねばならなかった。横浜空襲の時ではなかったかと思うが、夜空

に B-29 がサーチライトに照らし出されて浮かび上がった。細長い胴体と 4 個ずつあるエンジンがはっきり判った。高射砲も届かない。下の方で花火のような白い煙が上がったが、命中することはなかった。

そんなある日、父親が出先の岡山で被災したという。どういうことかといえば、親戚の引越し手伝いで、焼夷弾の直撃、火のついたオイルをかぶって全身に大やけど、近くのドブ川に飛び込んで火を消したそう。混んだ夜行列車に乗り、大阪経由で見舞いに行った。大阪に差し掛かった時には、空襲で夜空が真っ赤に燃えていた。列車は動かない。やっと病院にたどり着いたが、父は全身包帯だらけでミイラ人間のような感じだった。治ってからも、鼻や耳が解けて皮膚は赤くひどい人相だった。その時以後、子供たち 4 人は祖母のいる尾道に預けられて学校も行かずに、毎日兔の草取りだった。食事は鯉節の粉と麦ご飯が何よりご馳走に思えた。広島に新型爆弾が落とされたという話が伝わってきた。ラジオの重大放送で終戦になったことを大人から聞いた。それから田舎で衛生が悪かったのだろう赤痢が流行って避病院に入れられた。やっと治って藤沢に連れ戻されたが、親たちは尾道から豊表を取り寄せて売った。下駄や干し柿を仕入れて、商売したりで子供も売りに行かされた。鵠沼の金持ち風の家や、横浜野毛の商店街の路上だ。姉と二人でよく売れた。食うものといえばもろこしの干した粕、干し杏とかが配給になった。しらみが髪の毛についたとあって頭から DDT をかけられた。藤沢駅に MP がいて試しにギブミーチョコといったが、吸いかけのタバコを寄越した。ふざけるなと思って、以来試さなかった。絵描きだった父は PX で絹こすりという肖像画の商売を始めたが、夜中まで描いても、そんなに稼げなかった。中学に入ってから、帰りに焼き芋を食べによく行った。アイスキャンデーを食べに松本屋にも行った。絵を描き始めたが木炭がなかったので、消し炭を使って見たが上手くいかなかった。横浜に絵を描きに行ったが、まだ焼けビルが残っていて、焼けた赤く錆びた鉄骨がむき出しで崩れていた。食い物は箱で作る電気パンしかなかった。開米の玄米をビール瓶に入れ、竹の棒で交代に搗いて、やっとご飯にありついた。竹の棒は糠でびかびかだった。戦争中よりはましだったが、ろくなことはなかった。朕はたらふく食っている、汝臣民飢えて死ねという時代である。戦争を始めた天皇は全国を回り、手を振って歩いた。戦争中はお召し列車を見ただけで目がつぶれると教えられていたのになあ。そっと見たけど、目は未だにつぶれない。教科書が間違えていたとあって墨をぬらされた。子供心にも戦争はこりごりだと思った。

(やだ けんじ)

「鵠沼を語る会」活動の記録

(平成17年4月～平成17年9月)

総務部

運営委員会 3月29日(火) 13名出席

平成17年4月例会 4月12日(火)10時～12時 26名出席

議題1. 30周年記念事業実行委員会(以下実行委員会)報告—3月22日に第一回目

が行われ、委員長有田会長、事務局竹内、渡部、中島会員を選出。

最初の事業として、「史跡めぐり」を6月1日に鵠沼郷土資料展示室(以下郷土資料室)と共催して、千葉県我孫子市で行うことにし、交通手段は市のバスを使用することにして、例会出席者より参加者を募ったところ22名であった。(有田、渡部、内藤、竹内)

2. 30周年記念事業(以下記念事業)特別予算計上について—特別な記念事業のため、経費が多くかかることが予想され、新年度に特別予算を組み特別会費を徴収することが了承された。(有田)

3. 高木邸について—3月31日の高木邸利用実行委員会の報告。(有田)

4. 会誌「90号」の配付について—出席会員に渡し、他は配付表によって担当者に依頼した。(中島)

5. その他—原会員の著作が湘南朝日のトップ記事で紹介された。(杉本)

お話—内藤会員、渡部会員より「会誌90号」に記載されている「鵠沼海岸別荘地開発記念碑」の説明と話があった。新入会員、綿谷克延氏紹介。

運営委員会 4月26日(火) 16名出席

お話—5月7日(金)郷土資料室にて宮沢会員より「石上のうつりかわり」について話があった。 14名出席。

第19回総会・平成17年5月例会 5月10日(火)10時～12時 31名出席

第19回総会—冒頭に渡辺鵠沼市民センター長の挨拶があった。その後、別紙

「第19回総会議案書」審議を行い、原案通り全会一致で承認された。

5月例会

議題1. 会誌鵠沼「91号」の原稿について—記念事業の一つとして、全会員より

「語り継ぐ戦中・戦後」について原稿をお願いしたいとのこと。(渡部)

2. 運営委員会委員の選出について—委員名の発表があった。各担当部署については後日に決定することとした。委員18名

3. 「史跡めぐり」の詳細について説明があった。(有田、内藤、渡部)

「史跡めぐり」—6月1日(水)好天に恵まれて、郷土資料展示室との共催で、千葉県我孫子市の文化史跡めぐりを行った。参加者37名(うち語る会26名)

訪問先は、市鳥の博物館、村川別荘跡(村川夏子さんの説明あり)、志賀直哉邸跡、白樺文学館、柳宗悦別荘跡と武者小路実篤邸跡であった。

平成17年6月例会 6月14日(火) 10時～12時 30名出席

議題1. 運営委員会について—運営委員会の分担が発表された。各部会長は次の通り(敬称略)、総務部・佐藤和子、企画部・内藤喜嗣、編集部・渡部瞭、ホームページ・杉本辰夫。

2. 東屋海浜口門柱について—鶴沼市民センター裏庭に移設完了し、周囲に玉拓植が植えられた。また、説明板には高崎会員が作成した原画が採用されることになった。(内藤)

3. 資料配付網について—緊急のお知らせや資料配付について、配付網と担当者の発表があった。(岡田)

5. その他(1)会誌鶴沼「91号」について—「戦中・戦後」の時期を昭和12年～昭和26年とし、原稿提出依頼した。(渡部)

(2)郷土資料展示室—6月15日からの展示「あれから60年、戦中・戦後の鶴沼」について説明された。(中島)

お話—「鶴沼宮之前的祭囃子と私」について、藤が谷在住の小林偉利氏より、笛の実演をまじえて興味深い話があった。

第2回実行委員会 6月21日(火) 14名出席

運営委員会 6月28日(火) 12名出席

平成17年7月例会 7月12日(火) 10時～12時 29名出席

議題1. 7月24日(火)の公開講座について—渡部会員による講演会、現在の出席希望者は48名、部屋の収容人員は60名なので、一般の人たちにも呼びかけを依頼した。(竹内、渡部)

2. 東屋海浜口「石だたみ」保存について—旧東屋旅館で現地に唯一残っている遺構の「石だたみ」を現状修復保存することになった。(有田)

3. 会誌「鶴沼」91号について—現在原稿提出者5名、来月の例会に提出するよう要望があった。(渡部)

お話—鈴木会員より、ご自身が関わった「横浜事件」について、「私の八月十五日」と題して話された。八月十五日終戦の日、横浜戸部署の留置場にいた当時の生々しい体験談は迫力があつた。

第3回実行委員会 7月12日(火) 15名出席

特別講演会—7月24日(日)、渡部会員が「鶴沼のあゆみ」の講演をされた。会場満員の盛況で、ビジュアルな映像を駆使して分かりやすい説明であり好評であった。

第4回実行委員会及び運営委員会 7月30日(火) 14名出席

平成17年8月例会 8月9日(火) 10時～12時 28名出席

議題1. 東屋海浜口門柱について—7月21日(木) 鶴沼市民センター裏庭で、渡辺センター長、鶴沼を語る会有田会長、鶴沼の緑と文化財を守る会北村代表立会いの下で、門柱の説明板が設置された。(有田)

2. 第4回実行委員会について—(1)7月24日(日)の公開講座の参加者62名であった。(一般32名、会員30名)アンケートを取ったところ55名の回答を得た。大多数の人が郷土史に「興味がある」、説明が「分かり易かった」としている。(竹内)

(2)11月3日(祝)に行われる特別講演会は、元藤沢市教育長の小山文雄先生による、大正期の文人達、白樺派の人達を中心とした話であるとのこと。

(3)「鶴沼ゆかりの文化人」展の展示は、A4判1枚1人とし、氏名、生没年月日、業績と鶴沼との関わりを記載したものを共通規格にしたいと発表があった。(渡部)

お話—鶴沼の堀川に生まれ、昭和39年まで居住した若尾肇さんより、ご自身が体験された海軍兵学校や、海軍での思い出を話された。

第5回実行委員会 8月19日(金) 14名出席

第6回実行委員会、運営委員会 8月30日(火) 14名出席

平成17年9月例会 9月13日(火) 10時～12時 25名出席

10時より鶴沼市民センター裏庭にて、防火訓練があり全員が参加した。

議題1.「鶴沼ゆかりの文化人」展について—10月15日～翌1月15日まで、郷土資料展示室との共催で行われること。内容については実行委員会報告に基づいて報告された。(内藤)

続いて「鶴沼を語る会30年のあゆみ」について報告があった。(有田)

2. 特別講演会について—11月3日(文化の日)13:30分より、小山文雄氏による「鶴沼残照—白樺派と教養派」と題して講演がある。(渡部)

3. 会誌「91」号について—体験記提出者40名、会誌の印刷製本日は9月30日(金)で作業協力者を募ったところ14名が挙手した。

4. その他(1)公民館まつりが11月5～6日になって第2週の火曜日に部屋が使えないため、急遽11月例会は11月15日に変更となった。(有田)

(2)東屋海浜口の門柱跡地に石の説明板を設置することになり、説明文原案を決め発表した。(有田)

(3)会誌「91」号の会員寄稿者の配分は、多数決により計3冊と決った。

(4)プライバシー保護の観点から、会員名簿は今後年2回作成とし、住所、電話番号について希望しない人は名前だけ掲載することを決めた。(杉本)

新入会員 西村 望氏紹介

(文責 中島 明)

編集後記

- *今年、2005年は太平洋戦争終結から60年、鵠沼を語る会創立から30年という節目の年に当たります。そこで、表紙に大書したように大特集を組んでみました。題して「語り継ぐ戦中戦後の記憶」
- *幸か不幸か、当会の会員は圧倒的多数が戦中戦後の記憶をお持ちの世代です。今の段階でこの企画を立ち上げなければ、永久にその機会が失われかねません。
- *冒頭の2編は、編集側から「是非、この内容でお書きください。ページ数に特に制限をつけません。」と依頼したものです。その他は、各自1ページずつという制限で内容については自由ということで、全会員にお書きいただきよう呼びかけました。結果、半数を超える35名(冒頭の2編を加えると37名)の会員から玉稿が寄せられました。
- *1ページずつという制限をつけたのは、全員にお書きいただくとそれだけで60ページを越えるからです。結果として、半数強でもほぼ60ページに収まりました。
- *それは、寄稿者の約半数が、勢い余って1ページには収まりきれなかったからです。そこで今度は、どういう順序に並べるかに苦労しました。当初は年齢順にするか五十音順にするか迷っていましたが、そのまま並べると体裁が悪いと思い、1ページの制限を忠実にお守りくださった方の分は五十音順とし、はみ出した方については後半に体裁を整えるために順序を前後させながら並べることにしました。
- *記憶違いなどで、史実と矛盾すると思われる記述も見受けられますが、正確な歴史書ではなく、思い出の記ですので、そのままにしました。
- *今回は、予定通り9月30日に発行したものに多大な決定的ミスが見つかり、再発行に踏み切りました。この間、会員の皆様方には費用・期間その他諸々のご迷惑をおかけしたことを深くお詫び申し上げます。
- *次号は、「鵠沼を語る会創立30周年記念号-その2」として、語る会30年の歩みの総まとめと、創立30周年記念事業の紹介などを盛り込んだ特集を組む予定です。10月15日から3か月間開かれている「鵠沼ゆかりの文化人展」で取り組んだ中身は別冊にする予定です。(渡部)

『鵠沼』 第91号
平成17年11月30日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵠沼を語る会
藤沢市鵠沼海岸2-10-3
鵠沼公民館内
電話0466-33-2002

「鵠沼を語る会」ホームページのURLが変わりました。

<http://kugenuma.sakura.ne.jp/>